5861
2144
no. 8

Februaro LA SEMANTO: 1922

大正十年十二月一日（第三種郵便認可）
大正十一年二月七日印刷納本
大正十一年二月十日發行（毎月一回一日發行）

種蒔く人

行動と批判

第二年 第二巻 第五號

◇二月號◇

種蒔き社

BERKELEY
LIBRARY
UNIVERSITY OF
CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

種蒔く人二月號目次

―新年號發賣禁止―

發賣禁止の心理……（題言）……

三たび飢ゑたるロシアのために……（社論）……

變な客人（小說）…………前田河廣一郎

人間派と蟻の會議（童話）…………金子洋文

狸草花（童話）…………ワシリイ・エシロエンコ

死と生と一緒（小說）…………細井和喜藏

煽動（小說）…………新井紀一

坊主の資本階級奉任（漫畫）…………柳瀨正夢

無宗教者の宗教觀（評論）…………三和一男

プロレタリアの文學（評論）…………吉田金重

□批評

社會主義雜誌三つ…………初之輔

早く「文明から逃げ」ろ…………光造

「改造」の小說から…………遊平

芥川氏の「俊寛」…………弘二

戲曲二篇…………孝丸

兒童展覽會に就いて…………正夢

□世界欄

ロシアの饑饉と列國の干涉―勞農ロシアに於けるイザドラ・ダンカン―ダンカンの手紙―ザッコとヴアンツエッチ事件―マキシム・ゴーリキーとエスペラント

□地方欄

第八師團の出動と船川港―農村文化の提唱放浪の旅より

□婦人欄

女性の歌―婦人の解放

□生活

一四人の見た監獄の諸名士、聾人―靜動―赤帶

嘗て人間は神を造つた。今や人間は神を殺した。造られたもの、運命は知るべきである。

現代に神はゐない。しかも神の變形はいたるところに充滿する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである。是認するものは敵である。二つの陣營が相對する。この狀態の續く限り人間は人間の敵である。その間に妥協の道はない。然りか否かである。眞理か否かである。

眞理は絕對的である。故に僕たちは他人のいはない眞理をいふ。人間は人間に對して狼である。國土と人種とはその問ふところでない。眞理の光の下に結合と分離とが生ずる。

○○○○○○○○○○○○○○○
○○○。○○○○○○○○○○。
○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○。○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○。○○○○
○○○○○○○——世界の同志と共

種蒔き社

第二年第二卷第五號

種蒔く人

東167808

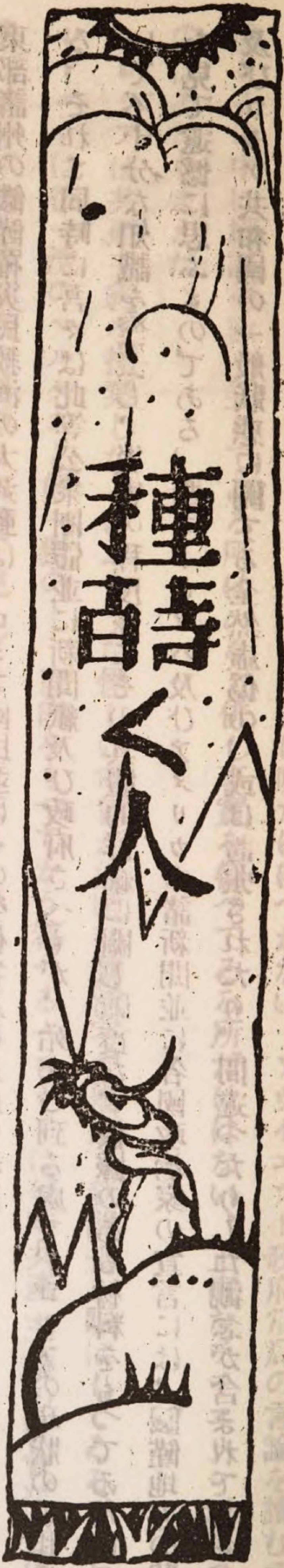
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

發賣禁止の心理

或るものが良いとか惡いとか云ふ斷定は、必ずしもその內容の如何によつてのみ決せらるるものでないらしい。事實、色眼鏡を透して見れば、如何なるものでも、良くも見え、また惡くも勝手に見ることが出來るやうだ。

内田魯庵はめづらしく、新年號の「太陽」に、「何が危險である乎」と云ふ題下で、言ひ放題のことを言つてゐる。もとより、その內容は何にも魯庵でなければ感じ得ぬものでもないが、魯庵であればこそ、勝手放題なことを言へるだらうし、また、「太陽」であればこそ當局は勝手放題なことを言はして置くものと見えぬものでもない。魯庵は散々不消化物を吐瀉した揚句、酒は身體に良くないと云ふ意味で、一眼前の露西亞の共產主義の暴虐蹂躙する。現代の文明を根本的に破壞して更に全く新たに造り直すといふ爭が果して人類の福祉である乎否乎を輕卒に決定すること躊躇する」と　如何にも神妙に反過激態度を見せかけ、扨て、さう云ふものゝ、お前達のやうな若造では禁酒を云々する資格が更に無しと云ふ句調で、「當に法を峻嚴にして其目的を全うし得られやう乎、且今の如く法の運用を事實上に下級の官吏に一任するは小さな危險を防がんが爲めに大きな危險を招ぐに非ざる乎を疑ふ」などと遂に酒呑みの本根を吐いてゐる。

僕たちは決して魯庵の言はれる「下級官吏」を輕く見るものではない。また、大きな危險を招ぐと招ぐまいと、僕たちの關する　のものではない。が、しかし、四度に二度まで禁止を喰つた僕たちとして、發賣禁止の心理が常に警察政治の高壓的色眼鏡の結果であるまいかを疑ふ。さうなると、



三度飢ゑたるロシアのために

現實のロシアに眼を閉ぢて架空のロシアを創造して、それにけちをつけることによつて僅かに滿足と安心とを買つてゐた資本主義の提灯持ち連の提灯持つ手かしびれがきれそうになつて批難の文句に行き詰つた時分に天道樣が一寸惡戯をやつた。ロシアの饑饉がそれだ。「ソヴィエット・ロシア」誌が指摘したやうに資本國の諸新聞ははじめて意地悪い滿足をもつロシアの眞相を報道することが出來るやうになつたのだ。

併し彼等は事實の報道をもつて滿足する程冷靜ではあり得なかつた。彼等は同胞の苦痛と慘狀とを肴にして一杯呑まずにはゐられなかつた。事實の誇張と虚僞の創造とが先づ第一に彼等のとつた手段であつた。併しそんなことは珍らしくない。これまで四年間彼等がやつて來た常套手段だ。

そこで彼等は新しい論理を創造し新しい科學を發明して從來の饑饉に關する學説を根底から破壞しやうとした。從來の科學では饑饉の原因は半ば以上を天災に歸してゐる。洪水、暴風、干魃、早冷、霖雨、蟲害等を含めた天災に歸してゐる。第二の原因は經濟狀態の幼稚である。第三は農業の進步の遲れてゐることである。現にレ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ーニンは「ロシアの若干地方では饑饉は千八百九十一年のそれに比肩すべき程度に達してゐる。これは、ロシアの經濟の發達の後れてゐることゝ、七年間の戰爭の苦い結果である」と言つてゐる。又ヴォルガ沿岸地方で甚だしい干魃のあつたことは周知の事實である。

ところが資本主義の手先やブルジョアの代辯人等が發明した新科學によると、今度の饑饉はボルシエヴイキの罪なのである。ソヴエット政府が饑饉の原因なのである。

ロシアは苦しんでゐる。ブルジョアの手先は狂喜して歌ふ。「レーニンは共產主義を棄てた」「資本主義は遂に復活した」「世界を脅かした惡魔は遂に退散した」歌の文句は千差萬別だが內容は千篇一律だ。仲には第三者を氣取つて英國の封鎖も、佛國の陸軍もどうすることも出來なかつたことを饑饉が成し遂げた……即ち共產主義の拋棄がそれだと知つた風なことを言ふ。

何れにしても今日程資本國が得意になつてゐる時はあるまい。饑饉といふ味方は彼等にとつては何より賴み甲斐のある味方だ。ロシアは呻吟してゐる。ブルジョアは狂喜してゐる。併しロシアは資本主義の壓迫に對すると同樣の熱心をもつて饑饉と戰つてゐる。その上に資本國の虛僞に對しても戰を已めない。チチエリンは八月三日附ヨーロッパ及アメリカの各國政府に宛てた長文の通牒の冒頭に次の如く言つてゐる。

「ヨーロッパ及びアメリカの殆んど凡ての國內に於ける種々雜多の公衆團體の注意を惹いたヨーロッパ、ロシア東部諸州の饑饉罹災民救濟の大運動は、ロシア國民並にその勞働者及び農民の政府の衷心より歡迎する所である。それと同時に吾々は此等公衆團體並に新聞紙及び政府さへもが、殆んど到る處で、ロシアの現狀の眞相について不十分な知識を發表し、災害の程度並にその具體的詳細に關し確實な、根據のある材料をもつてゐないことを見て遺憾に思ふものである。西ヨーロッパ及びアメリカの諸新聞並に各國政治家の宣言には、饑饉地方の狀態及びロシア共和國の一般狀態に關する全然虛僞の、或は誇張されたり、間違つたりした觀念が含まれてゐる、云々」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しかしロシアの政治家はウエルスも言つたやうに嘘だけはつかない。ソヴイエツト政府當局の言論を讀むこ可成りその中に權謀術數を弄してゐる所はある。併し事實を僞つてゐる所だけはない、正直なチチエリンが怒つたのはあたりまえだ。

ロシアは共産主義を拋棄したといふやうな怪しい電報が近頃初號活字で幾度も新聞紙を賑はしてゐる。併し、レーニンは彼一流のマルクスと好一對の――皮肉をもつてかう答へる「ロシアは何時共産主義の社會だつたか」と。ロシアは共産主義の目標に向つて進んではゐる。併しまだ共産主義になつたことはないのだ。

「それは詭辯だ」といふ人があるならレニンの古い著書を見るといい。彼は千九百二十年に出した「左翼共産主義」の中で妥協の必要を熱心に說いてゐる。彼は共産主義の社會が何等の抵抗も障害も受けずに一直線に實現出來るこ想像する程オプチミストではない。それならば元來プロレタリアの武裝も獨裁も不必要なわけである。共産主義を實現する爲めに必要な經濟的妥協はいくらでもやるこ彼は平氣でこうの昔から言つてゐる。農民の共産主義が困難なことははじめから豫想してゐたことである。それを饑饉の爲めにレーニンが急に宗旨がへをしたやうにはきちがへて糠喜びしてゐるのはたま〳〵彼等の無節操を表白してゐるやうなものである。

經濟的必要の爲めには資本主義國こ通商もやれば、資本主義國の金品の救濟をもロシアは歡迎する。併しそれは共産主義が降參したここを意味してゐるのではない。ゴリキーがフーヴアーに救濟を賴んだつてロシアがアメリカの資本主義に妥協したわけではない。ブレスト、リトウスクの媾和はボリシエヴイキが獨逸の帝國主義こ妥協したのだから英國の勞働組合だつて妥協してもいゝだらうこの批難に對してレーニンは答へてゐる。

君の乘つてゐる自働車が武裝した强盜團につかまつたこ想像して見給へ、その時君が君の金も旅劵も短銃も自轉車も彼等に渡してその仲間に加はつたとしたらそれあ明かに妥協だ。所が金も自働車もみんな渡すからその代り俺は自由にさしておいてくれこ言つたとしたらそれが『原則上許す可らざる』妥協こ言へるか？ 吾々が獨逸の帝國主義の强盜と妥協したのは此の種の妥協なのだ」と。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ロシアは滅びるだらうそうでないと都合が悪いから)」といふ假定の下にやつてゐるフランスの對露外交のみじめな失敗の連續こ、「都合はわるいが仲々ロシアは滅ぶまい」こ最近詮らめをつけた英國の對露外交とを比較して見るこブルジョアの二種の態度が見られる。前言は観念から事實を創造しやうとし、後者は現實に追隨しやうこする

吾々はロシアを不完全極まる國だから勿論批難するこことは出來る。併し批難するなら事實を批難しなければ藁人形を對手にしてゐるのでは何にもならない。

へんな客人

前田河廣一郎

今でも、一生威めしい肩書に祟られて、人間とはどんなものかと考へることさへ出來ないほど立身出世してゐる、法官黒田氏が、ある事件で名をあげて、まもなく、米國視察と云ふ名目の下に、またノ\金箔をつけに渡米して紐育のホテル・アスターへ泊り込んだ時分の話だ。ある日のこと、『梅津虎吉』と云ふ名を刷つた、粗末な名刺を、秘書役の村山が恐る〻彼の前にさし出したことがあつた。

うす汚い、植民地の磨滅しかけた四號活字で刷つてある名刺だつた。

勤勉な黒田氏は讀みさしの Jurisprudence に關する本を、重要書類や、懷中時計や、電話帳などのごつちやに乘つてゐる黒檀の卓の片端へ伏せて、縁なしのパンスネを、ぐいと鼻の頭へ嵌めなほした。

『どんな男か？』

『さやう瘠せた、眼の鋭どい、小柄な男で、顔を見ただけでは子供とも大人ともわかりかねます。一見前科者とも思はれる節はありますが、身裝は相應にきちんとして居ります。是非閣下に御會ひ申したい、私の名さへ御覧になればすぐおわかりになる筈だから、と、かう申して居りますんで。——』

黒田氏に氣のなさゝうな表情をして、名刺をぽんと銀皿の上へ放りながら、

『忙しいからと云つて歸へせ。』と云つて、一本五十仙程度の葉卷を、ぐつと噛みしめた。氏の言葉は、日本の齒醫者の拵へた入齒が季節によつて弛み出すと、妙に癇高になる癖があつた。外國の氣候は氏に適しない。そ

れて再び脊革の本を取りあげやうとする刹那、黑田氏の明晰な頭腦に、ある男の幻像が、くつきり浮んで來た。裁判所で、日に幾人となく判決を申渡す數ある人間のうちで、その男の顏だけがどうして五六千哩も隔だたつた異國で思ひ出せたかと云ふに、それはその男と黑田氏とは妙な緣で、前後二十回も顏を會ばせたことがあつた爲めに、自然と『虎吉』と云ふ一と癖ありげな名を、その男の顏と離すことの出來ないほど覺えてしまつたからである。何の特色もない、瘠せぎすな、ぎらぎらした眼を持つた、世上、よく意志の薄弱から犯罪者に墮落する種類の小男ではあつたが、彼が法廷に立つて、どんな宣告を云ひ渡されても、いつも氏を瞻上げて、につこりと笑ふ妙な癖があつた。まるで、刑罪を有難いもの、やうに心得てゐるらしい表情で引下るので、氏も三十年間法廷に職を奉じてはゐるが、こんな不思議な人間には遇つたことがない、と思つてゐたほどであつた。梅津虎吉——紐育——自分、から考へて見ると、氏は愕然として、本を卓の上へ落した。

『待て待て、會はう、面會をゆるす。』

さう窮屈さうに口をもぐもぐさせて、黑田氏は灰色な眼を天井へ向けた、黑田氏はもう六十に近い老人で、頭髮と云はず、口髯と云はず、みな灰色になつてゐた、彼は罪人を造る爲めに一生を送つた男である。わけでも、氏の灰色な眼は、日本の法曹界に有名なもので、その眼球はうすい硝子板を重ねたやうにじいと物の髓を剜ぐるやうな、銳い凜とした瞳が、絕えず外圍の世界に向つて向つて働きかけてゐたのであつた。

間もなく、ふかふかとした部厚い紅絨緞の廊下を傳はつて二人の靴音が扉の前で停まると、氏は氷のやうな視線をぎよつとその方へ配ばつた。

戶が開いた。村山の後ろには、まがふ方なき虎吉の顏がちらりとした。梅津虎吉は、特色のないところに特色のある男だつた。

『旦那、御珍らしう御ざいますね。』

その聲だ。いつも世の中へ今產れ立ての人間が物珍らしさうに挨拶をすると云ふ風になれなれしく話する聲に

續いて唇をひくひく上へ釣りあげて、白い齒を見せてから、まごまらない表情が見る間に微笑に紛れるのだ。黑田氏は曇り眼鏡をかけたやうな眼を、パンスネの底にひからせた。

『ふむ、その方は梅津か、ごうしてアメリカへ來た？』

虎吉ば、擦り拔けるやうに村山の後ろへ廻つて、油斷なくその邊を見廻しながら、黑田氏と眞向ひの、葡萄茶の天鵞絨の大椅子へ、無遠慮に、小さな軀をぼつこりと認めて、荒らい格子縞の洋服のポッケットから、銀の巻煙草入を取り出した。この連續的な動作は、この小男によつて行はれたが爲めに、一筆で畫いた曲線のやうに素速く圓滑に行はれて、その間、黑田氏の葉巻から、重さうな灰がぼつたり彼のモーニングの膝へ落ちただけの時間をだに要せなかつたのだ。

『旦那、いや、黑田さん、もうそんな句調は廢しだ、廢しだ。こゝはメリケンですぜ。』とシガレットへ點けたマッチの火を消す爲めと、黑田氏の威嚴を眼の前から拂いのける爲めとの二つの目的を以て彼は萎びた片手を振つて見せた。

『――――ごうして來たつて？ 裁判官こもある者が、まさか前科十六犯の、兇狀つきに、お上から旅行免狀が下がつて、海外へ犯罪術研究に派遣を命ずでもなからうぢやありませんか？ 日本郵船の歐洲航海を、ごこつかで突つぱなしたんで、おつこたんこは云ひつこなしさ、いくら外國でも、ポリの野郞は面倒臭いからね。………時に、黑田さん、今日はちよつくらあんたの名を、日本人の博奕宿でごろ〳〵してるうちに、邦字新聞で伺つたんで、ははァ奴さん御出でなすつたね、ぢや、ちよつと御邪魔しやうかなつていんで參上したわけなんだがね、これでも下町から、昔馴染だこ思へば、カー・フエアの十仙も使つてるんだ。なんこ、人間は偉らくなるべきもんですなア。――――』彼の圓滑な舌尖は言葉に刺戟されて、いやに早口になりながら何かしら、深い憤怒のやうな感情を眼の前の老法官の顏にそゝるやうに思ばれた。

『で、用件は何か？』黑田氏はっ薄つぺらな刃物で、うるさく耳の傍をぴたぴた撫でられた獅子かなんぞのやう

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に慣然として大聲を立てた、村山秘書役ば、所在なさに、主人と、このへんな御客との間に弛るみのない視線を張りながら二人の對話に耳をかたむけてゐた。

『いやに權柄づくだね。吉原へ行つて旗本がどなるなんざア、よく講談本にある圖だがね、自由平等のこの紐育邊ぢや、はやりませんぜ。實は、ちよつくら、御耳を拜借しに來たんで、旦那、濟みませんが御人拂ひを。』

黑田氏はさう云はれると、機敏にその灰色な眼で、對手の體を探ぐるやうに、肩先から靴の爪尖までずうつと點檢して、何等不審の廉がないと認めたもの、やうに、顏も上げずに、片手で拂ひのけるやうに村山に命じだ。

『よろしい。用があつたら呼ぶから。』

黑田氏は、村山の出て行つた時の空氣の煽りが、窓のレースをふわりと壓すのを見た時、肱椅子から、しやがれた聲を絞つた。

『その方は、復讐にやつて來たな？――』

二人の眼と眼は、決鬪でもしてゐるやうに、ぴつたりと空間の一點で挑み合つた、灰色な冷酷な眼と、ぎよろりと眼窩から飛び出た青條の入つた眼とが。虎吉の眼の方が先きに後退りした。

『――どう致しやして。だがね、黑田さん俺はこの頃つくづく考へたよ。どうしてまア世の中は、かう逆さまに出來てゐるんだらうつてさ。一昨年、市ケ谷を出てからこの方、廻り廻つてこの土地へ來るまで、またこの見ず知らずの外國へ來てからも、俺は隨分苦勞したからね。今日來たのア外でもないんだ。黑田裁判長、虎吉の云ひ分を聞いて貰ひていんだ。仕返へしを恐れるあんたでもなからう、その體で取組み合つた日にア年は若くともこつちとらは叶はねいや、論より證據俺ア兇器なんてものは持つて來ないんだ、觸つて見ねえ。――俺はつくづく考へてるんだが、一體あんた方はどう思つて罪人を罰してなさる？』

『どう思つてとは？』

『いや、罪人と云ふ奴は人間でねいやうなことを世間でも云ふし、あんた方だつてさうだ、俺たちを高いところか

ら瞰却ろして、まるで虫けらかなんぞのやうに失敬な口を利くぢやねえか？ほんとに、劣等動物とでも思つてるあんなことを云いなさるのかね？』

『凡て一國に法あり、社會の秩序を維持するには。』

『そ、そんな屁のやうな理窟はどうでもい、んだ。俺の聞きたいのは、かうなんだよ。ようがすかね、今からやつて、あんたとまア話してる俺が、あんたにはどう見えるかつていんだ。』

『窃盗前科十六犯の梅津虎吉ぢや。』

『ちがうね、俺の考たアてんでちがうから可笑しいよ。窃盗ていことが犯罪だと思ふからあんた方はそんな虫けらを睨みつけて物云ふやうな口調になるんだよ。窃盗した以上は前科何十犯だつて關はねえ筈さ。犯を重ねりや重ねるほど、腕が冴えるからね。俺は泥棒は職業だと思つてるね。職業も職業、あんた、こんなむづかしい職業は世の中に有りませんぜ。第一この職業に入るにア資本が必要るわ。資本つて云つても煙草屋や女郎屋の資本とア違つてね、俺たちのは、かう何んだ、人間そのものをぶち込まにア出來ねえんだ。大概のやくざな泥棒の職工は、身ぐるみすつかりぶち込めねえんで途中で改心するの、手を洗ふのつて變挺なまねしやアがるんだがね、そりや未熟工のやることつてさア。一生をぶち込んだ手合はさうは安々と宗旨替は出來ねえ、それしきやおまんまを食べる道がないだから、どうにもしやうがねえやね。一生をぶち込むと云つたね。軍人が戰爭へ出るでしやう、そして鐵砲彈に打抜かれて死んでしまふ、あの通りでさア。いやあれよりも俺たちの方は、もつと眞劍なんだよ。軍人が死にや、やれ名譽の戰死だとか、遺族の保護だとか、世の中の人間がちやほや云つてくれるが、俺たちがまかりまちがつて、ポリスに切殺ろされたり、絞首臺へ登つたりしたところが、誰が騒ぐもんかね。軍人にア敵がある、商人にア商賣敵や、相場の狂などもある、地主にア小作人、小作にア地主、みんな敵同志だね、しかし俺たちにア世間の人間がみな敵なんだ。いや、敵にするんだ、賊だとか、泥的だとか云つて、まじめに俺たちが職業をつとめてゐると、飛んでもねえところから横鎗を入れて邪魔する。まつ晝間、歩いてゐたところが、じろ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しろ世間の奴らア顏を見る。俺たちはてんで世の中から對手にされてねえんだ。何と云つたつて、こんな辛れい商賣はなからう、大體今の世の中の奴らア、よほご意氣地なしだね。日本なごも昔アあんた、國泥棒、位泥棒、金泥棒、女泥棒、船泥棒なんて、ずいぶん泥棒の幅利した國だがね、今の治世になつてからは、昔の泥的先生おつうに濟まし込んで、自分等の先祖が我勝次第に切取强盜をしたことなんざア、知らぬか佛で、[illegible]、私[illegible]ね。俺アもうこれら一生外國で泥棒をやるつもりだから構はねえが、日本同業者は可哀さうだね。』

虎吉はそこまでしやべると、自分の言葉の利目を對手の顏色に窺ふやうに、じいと顏と膝を乘り出して、卓の上へ片肱をかけた。

黑田氏は靜かに閉ぢた灰色の眼を、灰色の眉毛の下にそつと瞠くと、今しも熱心にしやべりつづけにゐた虎吉が、卓の上の氏の恩賜の金時計を、器用な手つきで、鎖ごとポツトへ入れてしまはうとするところであつた。

『こらツ！』大喝した氏は、突飛ばされたやうに立ちあがつて、虎吉の小さな軀にのしかからうとした刹那、何ものかが黑田氏の口の中から飛び出して、部屋の紅絨緞の上へぽかりと落ちたのであつた。金の裏打ちをした總入齒であつた。黑田氏は空らな上顎から妙な聲で

『あつ、これは――――』と言葉にならぬ奇音を發して、對手が盜賊であればあるほど、氏の尊嚴を保持する爲めに、あはてふためいてそれを拾ひにかかつた。その物音に隣室から驅けつけた村山秘書役は　疾くもそれと察して、黑田氏の入齒を嵌め直してやつて、ついでに落ちたパンスネも拾ひあげて、恭しく一禮して氏に渡した。黑田氏は村山の謹直な意外な腹立たしさを感じたやうに灰色な顏をくつと赧らめて、入齒を苦にしながら。

『こ、こんな盜賊を入れるからいかんのぢや。』ポツケツトに入れかゝつた金時計を滋を再びもとへ戾した虎吉に、顫へる指をさし村山をごなりつけた。

『旦那、御時計はこの通り御返へし致します。實はあんなことをしやべつてその實行をして見たくなつたもの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、どうも相濟みません。もう御暇にしますで、黑田さん、卵が始まりでせうか、鷄の方が先きでせうか？ これだけ御伺ひしたいもんですが。」と云ふとね、あんたのやうな月級泥棒と、俺のやうな小泥棒とどつちが先きに悪人なんでせうか？國家的にも、道徳的にも、大した[illegible]か。どうです？』

虎吉は殊勝らしく微笑しながら、立ちあつた。

『出て行け！まごまごしてるとホテルの探偵へ引渡すぞッ。』

黑田氏は肱椅子をとんとんと叩いて怒つた。

『へえ、へえ、ぢや御返辭はこの次に承ることに致しませう。どうも御邪魔さまで。ぢや、貴方もこれで失禮致します。い、え、これで良ろしいんで。どうも、へえ――』虎吉は帽子を深々とかぶつて、操人形のやうにひよいひよい絨緞の上を歩きながら出て行つた。

村山が卓の上を整理しにかゝつてそこに置いてある時計が替玉であつたのを發見したのは、恰と梅津虎吉がアスターの横手の廻轉硝子戸を押して、第五街の人と浪みに、口笛を吹きながらまぎれこんだと同時刻であつた。

（了）

人間派と蟻の會議

金子洋文

ある夜のことでした、東京市の中央丸ノ内にある立派な會堂で人間と蟻の會議が開かれました。

集まつた數は人間が五十人、蟻が五十疋、何れもその團體を代表したえらい仲間でした。

人間派の人々は大臣や、大將や、代議士などで、皆それぞ〵立派な洋服を着てゐました。けれ共蟻の方はいつ

もと同じ汚ない勞働服で、馬糞の嗅ひのする者もをれば、油の嗅ひのする者もゐて、如何にも貧弱でした。

今日の會議は外でもありません、今度地球を支配してゐたところの神樣がお年を召して、亂暴な狼や、獅子達を押へつけることが出來なくつたので、王座を人間か蟻の團體にいづりたいと言つてきたのでした。そこで、一つの團體のえらい方々が集まつて、討議をすることになつたのでした。

電燈が美しく輝いて、桃色の壁をてらしてゐました。右方の椅子には人間派がずらりとならび、左方の椅子には蟻の連中がづらりならんでゐました。

間もなく開會の鈴が議場になりひゞきました、すると人間派を代表した一人の大臣が演壇にのぼつて議長としての挨拶をいたしました。

『さて皆樣』と髮の毛の薄い、紅顏の久女大臣は笑顏をつくりながら、語り出しました。

『今度、神樣が王座をお退きになつたといふことは、我々生物にとつてまことに悲しい事實でございます。そこで生物の内、最も怜悧であつてこの地球上にかうけんの多い人間と蟻の何れかにこの地球の支配を任せることになつたのですが、この點今日の會議は非常に重大な意義を含んでゐるのでございます。そこで、これは私一個人の希望として蟻の諸君に申上げてきたいのですが。これまで諸君と吾々人間とはいろ〳〵な問題につい屢々會議を開いたのですが、そのつど紛争が起つて、いつも負傷者がたへたことがありません、ある時一疋の蟻は某大臣の股間にくゞり込んで全治三週間の負傷を負はせ、ある蟻は武勳かくしやくたる某大將の頭部に喰らひついて、これ又三週間の傷を負はせました、斯くの如く蟻の諸君が禮義を守らないといふことは、生物界の向上にとつて遺憾千萬なことでございます。』

『ノウ、ノウ、』

『それは人間派がずるいからだ。』

『技巧（テクニック）があり過ぎるからだ』

『議長をたゝき下せ。』

『議長不信任、議長不信任』

などといふ恐しい叫喚が左方の蟻黨から持上りました。

『靜肅に〳〵』とやさしい議長は非常に狼狽して、手をあげて叫びました。

間もなく、議場は前の靜けさに歸りました、そして議長の挨拶がすむと、今度は兩派を代表した人々が演壇に登つて演說をすることになりました。

『さて皆さん』と、初めに演說をしたのは人間派の首領である砂塔大臣でした、彼は背の低い少年のやうに綺麗な男でした、總明で才智があつて、技巧を縱横に馳驅して衆目を眩らます凄い腕を持つてゐました。

『私は神樣に代つて生物を支配するのは當然人間であると思ひます、生物として心理を解し、表現の技巧を持つてゐるものは人間以外にありません。華かな繪畫、甘いたそがれの音樂、あまりに復雜な人の心を描いた文學崇嚴な建築これ等のものは人間以外に持つてゐる生物はありません。一體蟻達は私達と比較して何を持つてゐるのです、彼等に道德がありますか、神に對する信仰がありますか、このやうに氣持のいゝホールを持つてゐますか、これは人間獨特の表現技巧です、又彼等は美しい着物を持つてゐますか、持つてゐないぢやありませんか、何處へ行くにも土くさい、馬糞くさい、汚ない勞働服一着ぢやありませんか、生物會議のあつた場合彼等はその汚ない服裝で、何うして支配者の權威を保つことが出來ます、彼等は美しい花を理解してゐません、櫻の花や、菫や、ぼたんなどがダンスをせうと言つたところで彼等は何うすることも出來ない、この點から考へてもこの地球を支配するのは吾々人間派であると思ひます。』

砂塔大臣の演說が終ると、非常に昂奮した一疋の蟻が泥靴のまゝ、ドカ〳〵と演壇に駈け上りました、そして早口でどりました。

『只今人間派の背の低い大臣が言つたことは皆でたらめです。人間の道德とか信仰とかいふ奴は噓です、若し

彼等に道德や信仰が會つたら牛や鷄を殺して食べないだらう、彼等は料理こいふ技巧を知つてゐる、この技巧で牛や鷄の形を全く變へて、吾々生物の眼をくらましてゐるのである、彼等は利益といふ慾に支配されて、生物界の秩序と幸福を亂してゐる、彼等はさかんに森林を伐り倒す、そして彼等一流の技巧を以て邸宅であるこか、別莊であるこか。妾宅であるこかいふ不必要なものを作つて、吾生物に洪水の苦痛を與へてゐるのである、こんな不道德のここを平氣でしてゐながらいかにも信仰面をしてゐる、神樣は老眼のためにこのありさまを知るここが出來ない、そしてまた神樣に使へる坊主共は、彼等の黃金の魔力で眼がくらんでゐるのである、彼は今こんな立派な建築が吾々にないと言つてたが、それは彼がまだ蟻の堂々たる建築を知らないからである。なる程このホールはなか／＼立派だけれ共吾々の眼から見るこ、凡てごま化してつくつてある、これは人間が狡猾で人間同志で盜み合つたり、賄賂をとつたりするためである、吾々蟻の建築はこんなに大きくはない、又大きくなる必要はない、何故ならずるい人間達に來てもらひたくないからである、けれ共吾々の建築は實に立派で堅牢である、それは利益のためにつくつたものでない、互ひの生活のため幸福のため、平和のためにつくつたものである、吾々の家には大廣間もあれば穀物庫もある、また産室もある、人間のやうに産婦にまで勞働させて男達が遊んでゐるやうな馬鹿な眞似は、吾々は決してしないのである、人間達よ、君等は吾々に向つて非常に意張つてゐるが、君等はまだ滿足な道路さへ持つてゐないぢやないか、而るに吾々は實に立派な石でた、んだ道路を持つてゐる、この點だけでも君等は蟻以下である、い、着物は何だ、そんな贅澤なものは何だなる程こゝに集まつてゐる、えらさうな顏をしてゐる連中は立派な洋服を着込んでゐる、だか人間凡てがさういふ着物を着て、幸福面をしてゐるか、吾々より汚ない着物を着て貧乏こ壓政に呻めてゐる人間がゐないか、君等はそれを恥じないのか、ことに滑稽なのは別嬪連こダンスが出來まいこの抗議である、なる程吾々にそんな洒れた眞似は出來ない、たが、この前の生物聯合大會の時、ぐでん／＼に醉つぱらつて、落花浪籍の醜態を演じたのはそも／＼誰であつたか、あれか道義ある紳士の行ひなのか以上の如く人間派のやつてゐることは、一つとして吾々には同感が出來ない、自分は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

神樣に代つて生物界を支配するものは蟻以外にないと堅く信ずるものである。』

蟻が演説を終つて席へ歸ると、今度は人間派の方から木地大將がとび出して演説を初めました。大將はくしやつとしたきれいな顏の男で、短氣で正直でした、彼は頭から飛車の王手をくらはすやうなはげしい調子でどなりつけました。

『今の蟻の演説は何だ、生二才のくせに生意氣至極だ、二十五才にもならないくせに人間に向つて文句をならべるなどとは何事だ、わしを誰だと思つてゐるか、わしはな日露戰爭の時、敵軍十萬を木の葉に蹴散らした山田大將だ、貴樣達蟻共は人間に最も大事なテーマを知つてゐるか、テーマを知らないで何うして生物界を支配する出來る、馬鹿物奴、貴樣等虫毛等は屋人の狂人も同樣だ、文句を言ふ奴がゐると、順番に蹴殺してやるぞ、それが恐しかつたら、默つて人間に降參しろ。』

大將に代つて演壇にあがつたのは顏色の蒼白い一疋の蟻でした、彼は皮肉さうに口元でほゝゑみながらおだやかに話しました。

『只今の木地大將閣下のお話には全く敬服いたしました。かういふえらい方々がゐらつしやるために人間界がます〳〵向上しいろ〳〵な協會が出現するのだと思ひます。けれ共、私達に最もわかないのは、十萬も一度に仲間を殺される方が何故人間派の代表をしてゐられるかといふことであります。さつき久女議長は吾々野蕃な蟻共をいましめるところ、多々ありましたが、かういふ物騷な方が、自分達仲間にをられることに氣つかれなかつたといふことは、誠に遺憾千萬でます。私の考へに依れば文明といふのは、平和に、幸福に暮して行くためのものであつて、人間のやうに無意味に憎み合つたり殺し合つたりするものでないと思ひます。吾々蟻の種族が全世界に榮えてゐる所以は、相[illegible]のです。[illegible]、だがお[illegible]ません、いはんや協會によく見る亂暴な規定などは露程もありません、それでゐて人間派より惡者がゐないのは何うしたわけでせう、これは精神的に結合してゐる

るためです。木地大將は吾々を弱虫であると言つて罵りましたが、先日の會議の際負傷して醫者の厄介になつたのはどちらでした、これは久女議長がさつき證明されたから、明白な事實であります。吾々ははるかに人間よりもすぐれてゐます、精神に於て、生産力に於て、智識に於て一切のものを通じてすぐれてゐます。人間は萬物の靈長ではありません、蟻こそ萬物の靈長です、だから神樣に代るのは吾々同志です。』

かう言つて蟻が降壇すると今度は背の高い大學の諏訪先生が演壇に上つてどなりました。

『お前達は生意氣だぞ、お前達は禮義を知らない、それで何うして大きなことが言へる、お前達に愛といふものがあるか、愛の鍵を持つてゐないで、何うして神秘な神殿の扉を開くことが出來るのだ、もう何も言はずに降參しないか。』

この時、せいかんらしい一疋の蟻が飛鳥のやうに演壇に飛上つて大學の先生をつきのけて、大きな聲でどなりました。

『今言つた人間の言葉は皆うそだ、人間に禮義などはない、愛もない、だから人間の仲間には、病氣で醫者にかゝることの出來ない者もをれば、明日の食物に窮してゐる者もゐるのだ、愛や禮義があつたら、そんな者がゐない筈だ、蟻の仲間は貧乏人もゐなければ金持もゐない、まして病氣でこまつてゐるものは一人もゐない。』

『嘘つけ食物が見つからなかつた時、お前達は何うするんだ』この時人間派の一人が大きな聲でどなりました

『吾々の仲間には堅い精神的な規約がある、吾々は飢ゑゐる時仲間へ食物を要求する權利を持つてゐる、と同時に飢えたるものに與へる義務を荷つてゐる、吾々は一たん口に入れた食物でもある時は仲間に與へてゐるのだ、こんなに徹底的な愛を人間は知つてゐるか、こんなに尊い禮義を人間は辯へてゐるか。』

『馬鹿ッ、そんな不衞生な眞似が出來るかッ』

人間派の一人の代議士がスックと立上つてどなりました。

「何が不衞生だ。」

「何が馬鹿だ。」

蟻の方でもまけすにごなりかへしました、會場は忽ちのうちにけん〳〵がう〳〵こ蜂の巢をつついた時のやうな騷ぎこなりまりした、戰端は開かれました、蟻達は彼等一流の戰法を用ゐて、敏捷に人間派の股間にくぐり込んでごん〳〵攻めたてました、

電燈はきえて、會場は暗闇こなりました、方々で人間のうなる聲がします、そして不思議な會合は永遠の呪咀を殘して空しく終つてしまひました。

（一九二一・一二・二三）

理草花

ワシリイ・エロシエンコ

一

坊ッちゃん、愛する坊ちゃんよ。それは「寒い國」の話です。寒い〻國——其國が一體ごんなに寒い國だつたか、それは私にはこても云ふ事が能きませんよ、兎に角それは恐ろしく寒い寒さの生れ故鄉の樣な國でした。顫えちやいけませんよ、寒い國は今も幾何も有るんですからね。その國の人々は頭も冷たく心も凍つて居ました、でも驚いちやいけませんよ、頭の冷たい心の凍つた人々は、そんな寒い國でなくつても、暖い國にだつて、今も數へ切れない程澤山ゐるんですからね。信じられない？ そんな人に遭つた事がない？ 坊ちやん少うしお待ちなさい。今にもう飽き飽きする程もそんな人を澤山見る樣になるでせうから……。併し成るたけ長くそんな恐ろしい時の來ないでゐる樣に祈りなさい——だが祈つても駄目だ！ 世の中にはそれなものが餘りに多く有り過ぎるんだもの…………。

その國の人々は愛や同情や友情——凡て今、人々の誇りこして居る樣な感情を、唯文字としてのみ知つてゐま

した。だがその字の意味を、誰も知つてはゐませんでした、そして又誰もそれを知らうとも思ひませんでした。坊ちゃんあなたは未だそんな變な人に遇つた事がないでせうねをーあゝ坊ちゃんは幸福だなあー、仕合いせだなあー……。私は坊ちゃんが羨ましい。

その國の動物の方の事は、私にはよくは分りませんけれど、何でも人間はその國の動物の中では冷血動物の仲間だと思はれて居るやうでした。——今でこそ温血動物……温血動物の中でも萬物の靈長だなどと云つて威張つてはゐますが……。でも其國の人々は自分で自分が冷血動物である事を、國の特徴として誇つて居る位でしたよ。國々の中にはそれよりももつと／＼變な特徴を大威張りに威張つて居る國が今もいくらも有りますよ。坊ちゃんは其を知らないけれど、今にぢき分つて來るに違ひない。

坊ちゃん、其麼寒い國だから其國ではどんな植物も育たなかつたに違ひないなどと考へると、それは大間違でですよ。その國では色々な植物が出來て、そしてその國の人々の主な食物も矢張りこの植物性のものだつたのです。寒い國の人々の毎日喰べてゐたものは、競草、闘草などの實でした、それを今、日本人が御飯やパンやを喰べる樣に毎日喰べてゐたんです。又その國の人々は戰草と云ふ花をも集めては、それを甘まさうに飲んでゐました。戰草の實からも一種のパンを拵へて喰べてる人々が少くは有りませんでした。一方その國の公園や大きな學校の花園には、無愛草花、武草花が年中咲き誇つて居ました。寺院や教會やには、全國民の拜まなければならない幽玄な花もあるのでした。それは空草花、夢草花、幻草花などでした。今の日本人が櫻や梅を見に行くのと同じ樣に、この寒い國の人々は戰草花見、競草花見などによく出掛けて行つたものした。そこの坊ちゃん達はいつも學校で無愛草花や武草花やなどを見せられてゐるのでした。學者や藝術文士などの大抵出掛けて行つたのは、空草花見、夢草花見、幻草花見などと云ふしやれたものでした。

坊ちゃん、僕は君に嘘を云つてゐるんぢやありませんよ、幾何お伽話だからつて……。

併し隣の國には又別の花も澤山に咲いてゐました。その内でも特に有名だつたのは感想花思想花などと云ふ少

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し四角張つた花でしたその花を食物にする人々も又少くありませんでした。獨草や冥草獸草など云ふ花を敬ひ禮拜した國民もあります。其等の國々の公園には、花壇の中に笑みかまけた愛草花の美しい姿が飾られて居て、よく其國の人々から賞でられたものでした。

國々によつて愛せられた草花も色々に違ひ、又その實の使ひ途も幾何かは異つてゐるのでした唯一つ、何處の國ででも愛せられた貴い花が有つたのです、それは理草花です、國々はその花の爲めに温室を拵へその道の專門家を置いてその花の研究に專念させてゐました。理草花は美しいから大切にされたのではありません。眞個の事を云へは理草花の花を見た者は未だ何處にもなかつたのです。唯、大昔からこの花について色々こ傳説や豫言やが方々の國々に傳つてゐてその中でも一番よく知られてゐたのは、この理草花の花が咲けばその爲めに世界は忽ち幸福になるに違ひないと云ふ一つの言ひ傳へでした。そしてその花を初めて咲かせた國はその爲めに世界第一の國になるであらうこ云ふ豫言なのでした。その豫言をさう眞面目には誰もが信じてはゐませんでしたけれごそれでも國々の學者達は皆全力を盡くして、この理草花を咲かせようこ努めて居ました。併し凡てのさういふ試みは毎時も皆失敗にばかり終つてゐました。と云ふのは理草花は一體に植ゑてから暫く立つこすぐ枯れてしまふのが常なのでしたから。理草花は花を咲かせる草ではないこさへ主張した學者も數多くゐた位です。兎に角『植ゆるとも枯れ行くばかり理草花』こ云ふ句を知らない者は、その當時何處の國にもゐない位でした。「寒い國」の學者達も、毎年國の温室で飽きずにこの理草花を作つて見ましたが、その結果は何時も外の國々の夫れと全く同じものでした。つまり植ゆるこも枯れ行くはかり理草花なのでした。

今私の云つた樣に「寒い國」では野にも公園にも學校にも。又お寺や教會にもごこへ行つて見ても一面に夥しい珍らしい花が咲いてゐました。坊ちゃんはそれは又ごんなに美しい事たつたらうなごこ考へるかも知れませんね。併しごうしてごうしてそれは又美しい所か全く恐ろしいものなのでした。その花の主な色は灰色こ重い鉛色こでした。その臭ひは血腥い臭ひか古い腐つた墓の臭ひ又は酒や亞片の臭ひでした。その國の空氣には一面にこ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のいやな臭ひが滿ち滿ちて居り、全國は遍くその色に褪せ盡くした樣にさへ見えました今はさう云ふ花が咲いてゐなくつても重い灰色に褪むだ國々は幾何もありますよ。さう思はない、坊ちやん？　さうかも知れませんよ。僕は盲目ですからね、色については論はしますまいよ。だがそんな花はなくつても血腥い古い墓場の樣な臭ひのする國は澤山ありますよ。感じない？　矢張りネー、盲目は鼻が銳敏ですからネ……。

この「寒い國」の人々の性質も又濁つた鉛色或は暗い灰色に染つてゐて又血腥い古い腐つた墓の樣な臭もする樣に思はれました。それは本當に淋しい淋しい國なのでした。坊ちやんは濁つた鉛の樣な色や、臭い古い墓の樣な臭ひを持つた性質の人を、今はゐないと思つてゐるの？……大きくなつたらそんな人のゐなくなる樣に努めなさい、ネ。怖い？　大丈夫よ！　今に慣れて慣らして臭れる人が多過ぎる程も澤山にゐませうからね。……。

二

「寒い國」の人々は、前にも云つた樣に愛し合つたり同情し合つたり、する事を知りませんでしたけれどその代り、傲慢で野心深くつて、全くその當時の世界の國々の間に有名なものでした。そしてその傲慢や野心やは日を追ふにつれて段々大きくなつて行く許りなのでした併し丁度その時分この國の人々には一つの悲しむ可き事柄があつたんですそれは國王に未だ一人の皇子も生れてゐなかつた事でした、全國民は眞心を罩めてた寺や社や教會やに空草夢草幻草の花を拜んでは、ごうか王樣に只の一人でもいゝから王子をお惠みくださいましと祈りました。併し神方はごう云ふ譯か一向にその祈りに耳を傾けようとはしませんでした。神樣方の坊さん達の云ふには、「寒い國」で生れさせる樣な王子は今一人もないと云ふ事でした。國民は皆『神樣方は一體怪しからん』とは心の中で思つてゐましたが何分神樣方の事なのでから、誰も何とも口には云ひ出しませんでした。

かう云ふ時に恰も「寒い國」の人々を嘲けるかの樣に、隣の國に偉い一人の王子が生れました。この王子は世にも最も幸福な星の下に生れ合はせて來た人だと云はれてゐて、その星を查べた學者達の云ふ所によると新しく生

れたこの王子はやがて世界中で一等偉い王子になるに違ひないと云ふのでした。この王子の名前も「偉い王子」と名付けられる事になりました。坊ちやんはまだ知らないだらうけれど、この世の中にはまだ何にもしないで偉いものにせられて了つた王子は勿論、生れても來ないうちにもう偉くなつて居る王子も珍しくない程澤山あるんですよ。

そこで隣りの國王は此事を聞いて大急ぎで要塞を修理したり、軍艦や武器を整へたりする事に沒頭し始めました。そして「偉い王子」の國がその王子の大きくなるのを待つてゐる内に、その隣りの國王が何倍か「偉い王子」の國よりも強くなるであらうと云ふ事は、もう誰の目にも見えないではゐませんでした。それでも「偉い王子」の國の國民は外の國王が次第に強くなつて行くのを見て少しも心配しようとはしませんでした。そして海軍や陸軍やを矢張り前の通りにして置いたのでした。唯「偉い王子」の敎育だけは、力を盡して注意深くやつてゐました。それを見て外の國々は尙一層心配しないでは居られなかつたのです。「偉い王子」の國には何か重大な秘密があるに違ひない、かう云つて多くの密偵が「偉い王子」の國に送り込まれました。「偉い王子」の國の秘密を探りに行つた澤山の密偵の中では、勿論「寒い國」の探偵が一番多數でした。或る探偵の報告する所に依れば「偉い王子」の偉らさは一體何處にあるのか今誰にも分つて居ない、「偉い王子」はまだまるで全くの子供で唯感草花、思草花愛草花、特に理草花、の研究に無中になつてゐると云ふこと、又毎晩宮殿の中の一番高い塔に登つては空の星の群を眺めてゐると云ふ事だけが今分つて居るばかりだと云ふ事でした。また「偉い王子」の國の人民は「寒い國」の國民とはまるで比べものにならない程の弱さだと云ふ事でした。感草や思草の實を食物とする人々は屹度次第に弱く弱くなつて行くものに違ひないと云ふ事でした。

「寒い國」の人々はこの報告を聞いて、「偉い王子」のまだ大きくなり切らない内に早くその國を奪つて了つた方がいゝんぢやないか知ら？と頻りに考へ込んでゐました。坊ちやん、私の話は昔の話だけれど、その時だつて戰爭しようと思へば、その口實を見付け出す位のことは今と同じ樣に、全くたやすい話だつたのですよ。その爲めに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は其時にも今こ同じ樣に、何處の國にも外交家こ云ふ連中がゐて、彼等は自由自在に、國と國との間に喧嘩を引き起す樣な種を探し出して來るのがその第一の義務だつたのです。坊ッちやんよ、君は外交家こ云つてる連中の爲めに人類がごんなに今まで困つて來たかこ云ふ事を、又現に今ごんなに困つてゐるかと云ふ事を、知らないでせうね。君は自分の幸福のためにそれを知らない方がいゝんだけれごも、おーあそれももうぢき知らなければならない時が來ますよ、可哀さうに………。

「寒い國」の外交家は「偉い王子」の國が戰爭には必ず負けるに違ひないこ云ふ事をよく知つてゐて、二三日の中に忽ち宣戰のための立派な口實を見付け出して了ひました。簡單に云へば、その「偉い王子」の國に送つた最後の通牒にはかう云ふ意味の事が述べられてあつたのです。

『「寒い王子」』は自分の國民に感草や思草の實から拵へたパンを食はせて國民の體質の次第に劣弱に赴くのを少しも意としない許りでなく、それが一番いい事だこ稱して盛に外國に迄も此を紹介し宣傳しつゝある。それは自分の國に對しては、直接に此を裏切らんとする惡む可き行爲である許りでなく間接には全人類の健康のために最も危險千萬な看過すべからざる行爲であると云はなければならない。それであるから、「寒い國」は一には「偉い王子」の國それ自身のために、且つ又二には全人類の健康こ幸福とのために嫌々ながら「偉い王子」の國に向つて宣戰を布告しなければならない。』

「偉い王子」の國はこの通牒を手にしてごんなに驚いた事でせう。併し坊ちやん、世の中には一國位でなく、全世界を驚かす樣な、もつこもつこ恐ろしい無理な最後の通牒が幾何もあるんですよ――お伽話にではなく、實際に、又昔に、てはなく今の今現在に……信じない？た父さんやたぢいさんに、訊いて見て御覽！

その當時「偉い王子」は丁度十二位でした。「偉い王子」の大臣達や外交家連は色々と相談に相談を重ねました。そしてたうとう矢張り「寒い國」こ戰はなければならないと云ふ決心を定めて了ひました。併し彼等がまだぐつぐつ相談し合つてゐる間に　敵軍はもう遠慮なくごしごしその國の中に這入り込んで來ました。大臣達はおはてふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ためいてその相談の結果を「偉い王子」の所へ『此は國民の意志で御座ゐますから』と申上げに參りました。併しその時にはもう「偉い王子」の姿は何處にも見られませんでした。何處へ行つても何處を探がしても、「偉い王子」の影さへ見付かりませんでした。大臣達は勿論の事、國中の人々がすつかりがつかりして了ひました。その間に敵軍は容赦なくごし／＼國内へ這入り込んで來て、暫くの間に忽ち全國は敵の手中に陷つて了ひました。瞬く内に感草や思草の花は、戰草、競草、鬪草の花に代へられ、忽ちの内に公園や花壇を飾る愛らしい愛草の花は、殺風景な無愛草花、武草花に取つて代はられました。空草や、夢草や幻草も、獨草や默草に代つてこの國の中に榮へはびこる樣になりました。國々はこの樣うな目も當てられない「偉い王子」の國の運命を見て最も幸福だと云ふ星の下に生れ合はせて來るのも中々羨しい所の話ではないなごと嘲笑つて居りました。

三

「偉い王子」は敵に盜まれたのだと噂せられました。又自分の國の外交家に裏切られて、敵の手に賣渡されて了つたのだとも噂せられました。坊ッちやん、今の世にだつて自分の王子や自分の國を裏切るものは少くありませんよ。併し「偉い王子」の場合には少くともそれは國の外交官の仕業ではありませんでした。「偉い王子」は自分から進んで位や冠を棄てゝ樣子を變へながら宮殿を逃げ出して了つたのです。「偉い王子」は敵を恐れたのではない。自分が戰爭なごに勝つて、世界中で一番强い王となる事を望まなかつたのです。それだけの事を考へても「偉い王子」が世にも幸福な星の下に生れ合はせて來たのだと云ふことが分るでせう。ネ、坊ッちやん！

「偉い王子」は自分が立派な星の下に生れた人間だと云ふ事を聞いて、自分は一體どう云ふ仕事をする事によつてその豫言の通り偉くなつてやらうかと云ふことを、小さい時分から考へてゐました。そして一生懸命その仕事を探し求めてゐたのでした。さう云ふ立派な仕事が必ずあるに違ひないと云ふ事を、王子は何よりもはつきり自分の心の中に見て居りました。毎晩―澄んだ無限の空に耀やかしい星砂子の瞬く每晩、「偉い王子」が宮殿の一番

高い塔の上に登つて、自分の爲すべき仕事を高い星の囁きに訊いてゐました。そして或る晩遂にその返事が屆きました。その夜、星が常よりも不思議に、神秘な耀きを瞬いて居ました。その夜、全世界は何時もよりも一層深く靜かに眠つてゐました。凡ての人類は宇宙が始まつてから此方初めて、——そして多分はそれは最後だつたかも知れません。——平和な幸福な夢を夢見てゐました。その夢は、幸福が誰の手にもたやすく觸れる事の出來る樣に思はれる、又その幸福は何時迄立つてもこの人類の上を去らないらしく感ぜられる、さう云ふのごかな夢でした。坊ッちやんよ、人類ご云ふものはそれは不幸なものですよ。あなたはまだそれを知らないだらうけれご、それもまうぢき近い内には分つて來るでせう。

或る深い山に隱れて、「偉い王子」が一心不亂にあの理草花の世話をして居ました。王子は理草花を廣い鉢の中に植えて毎日水をやつてゐました。又惡い風にも強い日にも當てない樣に世話をしました。併しその結果は矢張り前と同じ樣に失敗して了はなければなりせんでした。植ゆるこも枯れ行くばかり理草花……。

王子の倦むことを知らない忍耐の力を見て、山の人々は皆、彼を「偉い坊ッちやん」と云ひました。彼が有名な「偉い王子」であるここを誰も知らなかつたのです。山の百姓や木樵達には併し「偉い坊ッちやん」のするここは少しも分りませんでした。唯「偉い坊ッやちん」がその爲めに一日一日ご段々瘦せ衰へて行く事だけがはつきり分つてゐるのでした。彼等には、理草花のために全世界が幸福になれるなごご云ふここは、到底信じられる事では有りませんでした。一人の年取つたお爺さんは、縱しそんな事が能きるにしても鉢なんぞに植えたり溫室に育てたりしてゐたんぢやあごても駄目だと云つてゐました。それを聞いて「偉い王子」が夜、山の淋しい岩の上に登りました。そして夜間中、空の神秘な星に見入つて居ました。朝になるご彼は理草花を鉢から取つて廣い野の中に移い植ゐました。併し二三日も立たない内に、理草花はもう枯れ始めねばなりませんでした。

もう一夜「偉い王子」が淋しい岩の上に立つて、高い空の星を眺めてゐました。彼は今一度彼がその下に生まれ合はせて來たと云ふ不思議な星の意見を伺つて見たのです。朝になつて王子は再び野の中に立ち出でました。そ

して晩迄そこに鍬を持つて働いてゐました。——自分の疲れ切るのを氣にも留めないで……。土は王子の汗に濡れて露を含んだ樣に美しく潤ひました。「偉い王子」はその上に理草花を植ゑて見ました。暫くの間に花は不思議によく成長しました。そして今迄にまだ見た事もない程大きく育つて行きました。併し折角大き育つて行つた理草花も又冷たい露のために、激しい寒さのために、枯れ始めなければなりませんでした。又一夜、王子が岩の上に立つて不思議な星の瞬きを見入つてゐました。又一夜自分がその下に生れ合せたと云ふ世にも幸福な星に理草花の事を質ねてゐました。そしてその朝から「偉い王子」が終日、その理草花の傍に座つて、冷たくなつて行葉末にキスしたり、弱々しく枯かゝる莖に、又根本に、熱い涙をそゝいだりしました。二三日の内に理草花は、甦つた樣に元氣よく小さな蕾を出して來ました。盛に蕾を出して來ました、併しそれを花咲かす程な力が、どうしてもまだこの草には蓄へられてゐないと云ふことは、もう誰の目にもはつきり見えないではゐませんでした。理草花は蕾を出して併しそれを花咲かすことは出來ないで、又枯れ始めました、坊ッちやんよ貴君にこの「偉い王子」の淋しさが分るでせうか？　泣てはいけませんよ、これはお伽話ですからね。

も一度「偉い王子」は空の星に向つて自分の心を開いて見ました。も一度——そしてそれは最後でした——「偉い王子」は自分が世にも最も幸福な星の下に生れて來たと云ふことの證を賴んで見ました。そして、神秘な星の瞬きがまだ全くは消え切らない夜の内に、「偉い王子」が畑に出て、深く深く我と我が胸を切り開いて居ました。その、燃ゆる樣な紅い血潮で、彼は理草花の葉をも莖をも、あたりの土をも、美しく染め彩りました。東の空が次第に紫を帶びて來て、朝日が靜に現はれました。その光は、すがすがしく廣い野の中に射し入つて、宇宙始まつてこの、方初めて少くもこの地球の上に初めて、不思議な理草花の花咲いてゐるのを見出しました。その傍には胸深く、殆んど心臟に迄屆く程な鋭い傷を抱いて、「偉い王子」が安らかな永久の眠に入つて居ました。——人類はこの花のために何時か屹度幸福になれるに違ひないと云ふ事を、見果てぬ永久の夢に見ながら……

その時から太陽は一層美しく照り耀く樣になり、海は益々妙に永遠の歌を唱ふ樣になりました。全人類は夢に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ではなく現實に、理草花の花開くのを見ました。そしてその花のためにだけ、全人類が凡て幸福になれるのだと云ふ事を、初めてはつきり知る事が出來ました。理草花を咲かせる方法はあの「偉い王子」によつて、初めて發見せられたのです。坊ッちやん、愛する坊ッちやんよ！　その方法を忘れないで下さい。全人類には、今も理草花を咲かせるために、「偉い坊ッちやん」が必要なのです一日早く「偉い坊ッちやん」の出て來るのを待つてゐるのです。全人類の幸福のために理草花を咲かせる「偉い坊ッちやん」を呼ぶあの聲！……君にあの聲が聞えませんか！アッ、あの聲……よく聽いて御覽！……ネ、坊ッちやん、まだ聞えない！……まだ?……まだ?!

死と生と一緒

細井和喜藏

一

彼女が彼と結婚してからまだ三年にしかならないのに、もう三人も子供がうまれた。さうして今四人目の子が宿つてゐる。彼女は年子をうむやうな女子だけあつて、五ツ月にもなると隨分よく眼だつ。まるでセメン樽のやうな膨れ腹を抱えて、毎日々々工場へ通つてゐる。上から下まで眞ッ黑い着物を着。脊中には一才の子をこれまた脊負ひ、三才の子の手を引きながら二才の中の子を脊負つて、工場で履く上草履や工具杯を提げ、暗いうちから出かけゆくのだ。彼は二才の中の子をこれまた脊負ひ、三才のうえの子を無理失理に歩かせて彼女の後から續くのである。

工場には保育場があつて、其處には通勤者の子供が大勢預けられてゐる。子供達の親は皆工場で働いてゐて、九時と晝と三時と、僅か十五分きりの休憩時間に乳を與えにくるのだ。その紡績工場では、男子一人の勞働で、妻子を養つてゆくだけの收入がないので、誰も彼も夫婦共稼ぎをやつてゐる。朝五時の一番汽笛が鳴ると、すやすやと眠つてゐる子を引き起こし、よく眼が覺めないで泣く奴を、曳きずつて夫婦づれて工場へ伴れてゆく。そし

てすぐ保育場へ預けて了ひ、自分は食堂で飯喰つて仕事場へ入る。仕事は至極簡單、一日に幾萬回となく同じことを繰り返す。一日働き終れば、保育場から子を伴れて歸り何にもしないですぐ寢て了ふ。飯は無論工場で濟ましてくる。で、家には殆ど釜の必要がない、これが紡績工の家庭生活である。極度に分業の發達した紡績工業では、人一人が一本の糸の幾百分の一かを造つてゐるにすぎない。

彼と彼女も矢張りさうだつた。自分の人格を幾百萬片となく細かくきざんで賣つてゐた。しかし自分はそれを識らない。彼の家にはへつつひがあつても、それで飯炊くことが殆どない。世帶持つてから三年にもなるのに、一ケ月と續けて家でご飯を炊かない。

その工場は評判の悪い工場だつた。時間が長くて賃金が廉く、仕事に骨が折れるといふのだ。たまけに工場設備が不完全で、棉塵に侵されて呼吸器病に罹る。殊に夏抔は酷い。外の温度が九十度以上も昇るやうな時でも、糸が切れるといつて窓を開けさせない。そのうえ噴霧器が据え付けられて居つて、百五十封度からの水壓で絶えず霧を吹いてゐる。軸や機械の回轉によつて、その摩擦面からは高い熱が發散し、温度ば一層加はつて百度に近い。さうして霧の爲めに空氣に八十パアセントもの濕氣が含まれて居るのだから、蒸し暑いことつたらない。こんな工場だから仲々行き手がなく、自ずと人手に不足を感じる。

『どうだな、仕事は出來るか。仲々暑いだらう。』

彼がその工場へ始めては入り、機械の見習ひに就いてゐると上の奴が傍らへ來てかういつた。

『へえ、初手の二三日は迚も勤まらんかと思ひましたが、馴れりやこれくらいのこたやります。』

『さうか　まあ氣張つてやつて貰あう。この會社は辛抱する氣のあるものなら色々と面到みるからな。そのうちに更めて話さう。』

上の奴は去つた。彼は上長から親く言葉をかけられたのが嬉しかつた。それで後生大事と働いた。十四時間の長い間少しも休むことがない。機械そこのけに働く。過勞によつて自分の生命が消耗されてゆくのや、そんなに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

働いた結果、利益は誰の懐に歸するかといつたことは、彼の考えるところではなかつた。唯働けばいゝ。人間は働きに生まれてきたのだと習つた。『稼ぐに追ひつく貧乏なし』といふ諺もある。稼いでさえ居りやまあ喰つてはゆける。そのうえ何時かは金が留まるのだ。かう考える。

なる程彼の考えはあやまらなかつた。毎日六十五錢の日給の上、更らに二歩といふ歩増しがつき、兎にかく工場にさえ出りや七十八錢の金はとれる。さうして工場で飯を喰えば僅か一日十二錢、家賃を拂つて小遣つかつても月十五圓くらいは殘る。彼は實に有難く思つた。賃金制度に感泣した。

彼が田舍で百姓してゐた時には、一圓の金にも緣が遠かつた。農産物を賣ることがあつても、凡ては家長である兄のものとなつて了ひ、彼は半期に十圓か二十圓の小遣しか與えられなかつた。十圓といふ金は、どれ程貴かつたであらう。それが一度都會へ出てからといふもの、一ケ月十圓からの金が殘るのだから、金の成る木にでも出逢つた心地だ。全く彼は悅んだ。

『どうでえ新いの、暑からう。お前よく辛抱するな。此處で一ト夏越す者はすくねえんだぜ。お前全く感心だ。』

古參の仲間がいふ。

『なに、暑いちうたつて田の草とりに較べりやあ別に何でもありませんよ。』

彼はかう答える。あの沸騰するやうな炎天の青田で、四ツん這ひになつて田の草とることを思えば、或ひは幾らかましだつたかもしれない。彼は田の草とりと比較する。

『よう新いの、十四時間も働いてお前、六十錢や七十錢の端た金貰つて、おまけに小言許りいはれてエラい仕事して本統に詰まんねえなあ。』

他の同胞がかうきくと、彼はすぐもつと酷い軍隊生活を考える。軍隊で三年間もたゞばたらきしてきたのだ。それでもどうも仕方がない。さう思えば工場の勞働は有難かつた。

その工場では何時の程からか、勞働者の足止め策として、結婚奬勵法ともいふべき規則ができてゐた。内容は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

漠然たるものだつたが、男工と女工とが會社の許可を得て結婚する場合、會社から祝ひとして若干の金子と世帶道具を給與することだつた。その代り其の給與を受けたものは、結婚後三年以內に餘所の會社へ轉ずる譯にゆかなかつた。

此の政策は非常に有効だつた。何分子ができれば廉い賃で預かつてくれるし、社宅は貸してくれるしするので、結婚の多いこと一年に三十幾組の夫婦ができあがつた。結婚すると不思議にまた辛抱するのだ。

正式に結婚しない男女の關係も、喧くいへば居なくなるので放任してあつた。女工寄宿舍へ男工が泊まりにいつたり、寄宿の女工が外で泊まつてきたりしても、默つて見逃す場合が多い。放從きはまるものだつた。

彼の純朴さはすつかり上の奴の氣に入り、なかなか受けがよくなつた。彼が入社してから半年も經ち、暑い一と夏は越して了つた。

『この夏入社した奴はなかなか性が良いですな。彼奴は見込みがあるから速早嫁の世話して、社宅へでも入れた方が安全ですな。』

『左樣、組長に云ひつけて誰かとりもたせたらい丶でせう。』上の奴がこんなことをいふ。

二

十二月二十七日は工場の運轉仕舞ひで、夜晝休む隙なく一年中廻はした機械を、一週間許し休ませるのだ。勞働者が休むのも、一週と續くことは正月きりよりない。男女工達には休みが一等嬉しがられる。

正月休みの一週間には、五ッ組の夫婦ができあがる筈になつてゐた。そのうちの一と組が彼と彼女であつたのだ。

姑息な算盤から割り出して、會社は五ッ組の新夫婦を祝福した。社宅は供給され、粗末乍らも世帶道具の一ト通りは運ばれる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼女は永いこと寄宿舍に居り、友達は大勢あるし、部屋長ではあり呉服屋や小間物屋の取り次ぎさして居つたので貰ひ物が澤山ある。寄宿の友達は有志五十人で簞笥一棹を贈り、呉服屋は一ト重ねの衣裳を贈る。小間物屋は頭の道具一切を祝ふといつた騷ぎだ。それは彼女が、女工相手に何千圓といふ商ひする出入商人に、買いつけや集金の便宜を與えたお禮で、ずつこ以前からの習慣になつてゐた。

彼の友人はこれ亦出し合はせて夫婦膳を買つて贈つた。組長が一人で戶棚をくれた。かうした貰ひ物に對して土地の習慣として彼等は返禮に饅頭を配り、愈家庭生活が始まつたのである。彼女は女工寄宿舍から出ることができた。しかし皆から折角こうして貰つた世帶道具を、使用する時は年に一ヶ月こない。飾り物に過ぎなかつた。

彼が彼女と一緒になつてから五ヶ月目に子がうまれた。人々は不審に思ひ、なかには前の男の子だこいふものもあつたが、彼は何こも答えなかつた。初めのが男で次ぎが女、三番目が男だが、ごの子もごの子も胎毒でもつて體が石炭の焚き殼のやうになつてゐる。工場に病院があつてそれに診て貰ひはしたが一向癒らないので放任してゐるのだ。うちでも上の子が一番酷い。うまれてから此方べつたらこ出續けで、保育場でも遊んでやる子供がない。痛いので頸を縮かめて、隅つこに小さくなつてゐる。育婦達もその子の傍へ寄ることを嫌つた。彼でも彼女でも、不憫とは思ふのだらうが、全く手のつけやうを知らないのであつた。

彼は彼女こ一緒になつてから、よし子供ができたこしても、一人でゐる時分よりか金が殘つた。二人稼いで月末の勘定とつた時、四十圓の貯金は容易にできた。時々貯金の通帖を出して「矢張り働かにならんものだ。箸片しもたなかつた一本腕から、これだけ留めたのだ。」と獨り言いふ。

三

彼女は四回目の腹が、漸次膨きくなつて臨月が近づいてくる。

「子許しうんて金遣ひあがつて……」

日頃酒抔飲まない温順い彼が、或る勘定の晩ごうしてか大變醉つて歸つた。そして彼女が、もう來月の末あたり產まれるかもしれないから、何時もより二十圓だけすけなく貯金しやう。』とつたのを尖り聲で怒つた。

『何やつて……子許しうむつて。何もな、わてはうみたいこたあれへんけご、おまはんが拵へるんやないでか。』

『なんかしてけつかる。われが居らなかつたら、子なんか出けへんわれ。』

『おまはん何云ふんてよ。おまはんさえ傍へ寄つてきいさいせな、腹なんか膨れへんで。』

兩人は飛んだ喧嘩をしだした。

『なあ、われと餓鬼さえなつたら、わいはもつこ思ふことが出きるんだ。本統に餓鬼許したれてわいを苦めやがる。』

『おまはん今日はごうしたんで。氣でも違つたんでないで。子があつても余所こ違つて二千圓も貯金したやないか。何をいふんだえ。罰當たりなここいもんでないわ。』

『ペラペラ饒舌りやがるな。癪に觸はることがあるんだ。』

『わてのロでわてが饒べるんがごうしたんで。氣に入らんので。』

彼女も容易に敗けない。彼はもう相手が自分の妻であることを忘れてゐた。さうして彼女の頬つぺたを思ひきり平手で撲つた。

『おまはんわてを叩いたでよ。』

喧嘩は愈よ本物になり、二つの異性が劇く爭鬪し始める。子供が眼を覺まし屹驚して泣く、彼が大聲にて奴鳴る、彼女が切れるやうな聲で口答えする、はては小道具が飛んで壞れる音がする。

社宅の夫婦喧嘩は珍しくないので誰も仲裁に入る者がないが、彼ご彼女の喧嘩は滅多にないので、近所から駈けつけた。漸く分けて双方訊いてみるが別に大した原因がない。さうして彼女ば出てゆくの一點張りだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『わては誰か止めてくりやはつてももうよう居まへんのや。あんな人の處に居つたら了ひの果は殺されますよつて。』

『あんた、そんな肥きな腹抱えてごうしまんのや、一對何處へ行く積りだ。』

隣りの細君がいつても、彼女は頑こして應ぜない。

『三年が間な、わてはあの人に敗けて勘定取つたこされまへんのや。貯金がつて半分から上わてがしてゐまんのやよつて出る處へ出てわての分だけ貰ひます。』

『あんた、こんな些細なこゝで離縁する氣か、子供の三人もあるのにそれはあんまりやでっ』

『子供はあの人が拵えたんやよつて自分でに引き取りますやろかいな。わてはこんな意氣地無しと一緒に居らんでも寄宿へは入つて獨りでゐます。』

彼女は飽くまで家出を主張するのである。

職工街の夜は更けてゆく。夏の宵の蒸し暑さも何時しか去つて、涼い夜風が吹いてくる。あたりは寂寞こして工場の錘の音のみが重苦く地響きして遠くから傳はる。こ、けたゝましい汽笛が鳴る。十一時三十分の夜食を報ずる汽笛だ。近所の者は明日の仕事に差支するので皆そゝくさ歸つて了つた。

彼女の體がみえなくなつた。けれごも彼は工場を休んで探してみやうこもしない。小さい子供達は練乳を持たせて保育場に預け、男手で三人の子供をみて居つた。行く末自分一人で育てる決心だつた。が、彼女を怒らせるやうになつたのが、返すがえすも後悔だつた。

こころが二週間程して、ヒヨツコリ彼女が歸つてきた。困つてゐた彼は文句のあらう筈なく、喜んで無條件で家に入れ、以前の如く共稼ぎを始めた。彼女は『あの晩何のためにあんなこといつたのか』と度々彼に訊いたがごうしても彼はそれに就いて答えない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四

今まで些とも感じなかつたことだが、彼は莫迦に體の倦いのに氣づいた。家へ歸ればすぐに寢てゐるのに、工場で眠くて仕方がない。機械のハンドルを把つてゐてつい知らずに眠つて計器を過ごしたりすることが往々あつた。且つ胸がつかえたやうで息苦しく、時々頭のなかで早鐘をつく如き音がする。頭がフラフラッとして眩が暈いさうだ。普通の狀態ではない。

彼女は漸次產み月に迫まる。今までの子ではそんなことなかつたが、鬼のやうな彼女が仕事を厭がるやうになつた。さうして天麩羅の海老や酸味の食物を好むのである。兩人とも蒼い顏してゐる。人は彼女の惡阻が彼に傳染したといふ。彼も實際妻の惡阻が夫に移ることはあるのだと思つてゐた。『惡阻は女子の氣儘から出るものじやて、叱つてでも倒れるまで仕事に出した方がよろしいで。できるだけ長く仕事をすると、お產が安おます。』年寄りがかういつて忠告するので彼女を無理に工場へ出す。すると何時しか惡阻は忘れて了つた。成る程と思ふ。

子供達の瘡は增々酷くかうせてゆき、上の子は眼の內部へまでも變なものが出だした。

機械は百度の暑いなかで呪はしげに運轉して居つた。ところが茲に問題が起こつたのである。毎年さうしたことはなかつたのに、その夏に限つて糸が大變黴たのだ。會社が何千圓とかの損害を被つた。半期から表向き彼を媒介した組長が罷め、彼が後任となつて會社から仕事を委託されてゐるのだから、糸の黴た責任は免れない。彼は當然擔ふべき自分の過失だと思つた。さうして夜の眼も寢ずに考え研究したが、猶ほ原因を究めることができない。上からは酷いお目玉を頂戴するのであつた。彼は漸次衰弱して押せば倒れさうになつた。然し糸の黴る原因は依然として不明だ。

『一週間に此の調子を直し、黴糸を出さぬやうにしない時は、組長の位置は剝奪する。』工場長から最後の命令が降つた。彼は死刑の宣告を受けた如く、蒼くなつて慄えあがつた。

『あ、あのローラが惡い。あれを取り換えなかつたらあかん。屹度あの凸凹を平らにさえすりや糸は黴くなる。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼は夢にまで工場のことをみる。それ程仕事に忠實だつた。

その日愈よローラを取り外し修繕することになつた。かくして調子が出なかつたら。彼は辭職と覺悟を求めてゐた。

彼は銅製のローラに聯結されてある蒸汽管を取り外しにかゝつた。スツパナを持つて螺子(スクルウ)を弛め、曲形の鐵管な取り外すのだつたが三本で締め付けられてゐる螺子釘(ボルト)を二本弛めた時、恐ろしい壓力でもつて蒸汽が噴き出し殘り一本の螺子釘を切斷して了つたのである。その瞬間分離器(セパレーター)といふ內筒に留まつてゐる五十封度の蒸汽が、紫色して劇しく噴出し、彼の體一面を包圍しだ。と、二三分の後にはその室一杯に蒸汽が籠つて鐵管の口からは猶ほ猛烈に生蒸汽が噴き出る。

吃驚して場から一散に飛び退いた部下が、汽罐場へ行つて蒸汽を止めて貰ひ息切らして歸つた時には、室に白い湯氣が濛々として咫尺を辨ぜなかつた。屋根へ廻はつて天窓を開け放ち立ち込めた湯氣を出し彼を救けだしたが、彼は全く氣絶して蒸汽のために赤き水々しい海月のやうに膨れあがつた燒傷が體一面で、手のつけやうがなかつた。

彼は迂濶りして主蒸汽管(メンパイプ)の基に在る止瓣(ヴアルヴ)を閉ぢて置かなかつたのだ。

× × ×

氣絶した彼の體は部下の職工等によつて病院へ搬ばれ、繃帶してすぐ家へつれ歸られた。病院で息は吹き返してゐたが。きはめて低い分からぬ程の虫の息だつたそのうちにも彼は妙な手眞似をした。それはローラを機械から取り外して、表面を修理する動作だつた。夫の變事を聞いた彼女は、肥きな腹してゐるにも拘らず一散に駈けて戻つてきた。

「おまはん……」

上り框でかう叫んで夫を呼んだが、後の聲が續かない。急に産氣づいて一歩も動けなくなつたのだ。彼を搬んで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きた部下の男工は、どうしていゝやら分からない。周章てマゴついてゐる。近所の者も大概工場へ出勤してゐるので、誰も寄つて來手がない。彼女は苦悶し始める。

そのうちにたつた一人殘つてゐた筋向ひの老婆が飛んできたが、彼女は今日最大の苦みをしてゐるところだつた老婆は狼狽えてゐる男工を會社の產婆へ走らせたが、子はその後で產まれて了つた。

始めて空氣の絕對壓力に觸れた小さな者が、變な聲して泣く。此の時奧にゐた彼は、『ヒイ……ン』と一度大きく息を吸ひ込んだ。これが彼最後の呼吸だつた。

うまれた子供は女子であるが唇が二叉に裂けてゐた產婆は片輪だが育つ子供だといふ。

誰かに、三人の子供が保育場からつれて歸れた。子供は此の大事の前にも、案外平氣なもので泣きもしない。

彼の屍と彼女の脫け殼と、胎毒の子供と片輪の赤子、それらのものには頓着せず、鍾の響きは盛んである。

長い夏の日も海の彼方の山に傾きかけた。狹い穢い社宅、彼女の家は軈て夜の幕に包まれる。

（一九二一・一二・四）

煽動

新井紀一

せめて景氣だけもうんとつけて、威勢のいゝ喇叭を吹き鳴らすなり、軍歌を歌ふなりして意氣容々と營門をくゞりたかつたものだ。それだのにどうだ。最も威勢のいゝものゝ表象とされてゐる軍旗は、吊旗かなんかのやうにだらんとしほ垂れて隊の先頭を行く。

聯隊長の馬、聯隊副官の馬、その他聯隊附武官の五六騎がまるで魂を拔かれた亡靈のやうに悄然として、ぼつくりぼつくりと行く。いくら眼をこすり直してみても、これは生命のある現實の世界に生きてる軍隊ではない。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何かの傳說にでもある幽靈の軍隊だ。馬も默つてれば人も默つてゐる。

何んとかこの寂寞を破るものはないか。ヒツヒ――ンと馬が一つ嘶いてくれてもいゝ。ワツハハハハ……と哄笑するものはないか。この影繪のやうな軍隊の行進を見、自分もその一人かと思ふと、何んだか頭がへんになつて來る。

隊はいま、人つ子ひとり通らない死のやうな暗い街をザツクザツクとゆく。どう見ても生命のない武者繪の行列である。しかもこの眞つ暗な夜――朝と云ふには早い三時だ。何ん爲めにこんな眞夜中をえらんでそして靜肅に靜肅に、とロ一つ開かせないで、まるでお弔ひの行列のやうに歩かせるのだらう。何んとなく氣が滅入る。生きながら眞暗な無限の穴ぼこへでも陥ち込んでゆくやうに感じる。

ザツクザツク……と、靴の音だけはたしかに現實に、無氣味に響いてゐる。蜒々とした三千の强者共は長蛇のやうに闇から闇につゞき、そして闇に消えてゐる。

出征命令を受けた第××聯隊が今營門を出るところである。

こいつら皆んな生きながらミイラになり居つたのか――と、この時俺の左手はいきなり、綾つり人形のやうに規則正しく。オイツチニ、オイツチニ、と振つて隣りの奴の右手を喰らはしたのである。

「アツ痛ッ」と叫んだそいつの聲は靴の音と一緒に何んの反響もなく闇の中に消えて了つた。

ほう、血が通つてるな――と云はうしたが、俺は云はなかつた。暫くしてから「やア失敬！」と云つてみたが、隣りの奴、何んとも云はない。

お前怒らないのかい――と云はうとしたが矢張り云へないので「たい兄弟！どうも今度は生きちや歸れさうもない氣がするぜ」と少し調子を變へて云つてみたのである。が、隣りの奴それにも返事をくれようとしない。

隊は相變らず底の知れない沼のやうに、深い深い沈默を守つてゆく。ザツクザツク……と靴の音だけか耳に響く。

張合ひのねえ奴だ――と呟いてみたが、それも闇の中に空しく吸ひ込まれて了つた。俺達はいま三十分の後には、俺達をどこかへ運んでくれる列車の眠つてる停車場に着くのだ。

召集令を受け取つて隊に驅けつけてから今日までに一週間、その一週間俺と寢臺を並べてゐた内田を俺は今默々と歩きながら胸に描いてゐる。

奴、一體どこへ失せやがつたのだらう――俺の胸は痛む。若し俺が喋つたことが、奴の逃亡の動機となつたのなら、俺は奴の一身を誤まつた事に對し、又、國家の干城を一人失つた事に對して、國家とその父兄に謝さなければならない。が、それにしても奴は一體どうして逃げ失せたのか――先つきまで、五時間前床に就くまで居た筈の彼れである。まださう遠くへ行つてる筈はない。その彼れを俺はいま自責に似た感じで胸に描いてゐるのだ。

愈々出發と云ふ命令を俺達が受けたのは、昨夜寢る少し前で、それから寢て喇叭で起きて、整列になつて彼の逃亡は發見されたのである。整列のどさくさまぎれにどこかへ身を隱したのかもしれない。

死のやうに默々とした隊は靜々として枚を啣んで進む。この三千の人々の内、今一人として「死」を思はないものがあらうか。死――それは今は單に時間の問題である。只、十數日間といふ問題である、遲くも十數日の後には海を越えて××に着く。そして砲火の下に曝されるのである。

「死」を思つてる俺の胸をいつの間にか内田の映像が覗いてゐる。そして「澤田さん」と呼びかける。「口では皆んな偉さうなことを云つてるが誰れも本氣に俺は死んでもいゝと思つてる者はないでせうね」と云ふ。

「勿論さ！」と俺が答へる。内田は去年の秋歸休兵として除隊になつた許りなのである。そして俺は彼よりも二年、年上の故參兵なつてである。ところが俺はまだ獨り者の呑氣な身の上だのに、内田は既に細君がゐるのだ。入營前から相思の仲だつた女を今年の春貰つたのだと云ふことである。母親はもう何年か前に亡くなつて、今は只、父が一人家に居るのだと云ふ。

内田はその父親を非常に恐れてゐる。彼が殘して來た最愛の細君をどうかしはしないだらうか――と云つて。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もとよりはつきりとそんな事を俺に打ち明けたわけではない。が、そんな風の事を心配げに呟いた事がある。
「まさか」と俺はその時云つた。「まさか」と云つたが、俺はその父親なる人を知らないのだ。只、道德と云ふものに信頼して、假りにも父娘と云ふ關係にある二人を疑ふのは悪いと思つたのである。
併し、俺は不幸にもこれまでに父にして嫁を姦した場合を知つてゐる。だから内田の場合にも絶無を保證することは固より出來ない。結局に於て男と女である。彼れ内田は永い間歸らない。生死を賭して戰つてゐる。況して彼れが戰死でもしたらどうなる？だが、俺は只「まさかと」云つてお茶をを濁して置いた。併し、彼れ内田が心配してゐる位だから、その父なる人が如何なる性格の持主であるかは大凡推察することが出來る。
「氣の毒な男よ」と、俺は呟やかずにはられない。
内田は更につゞけた。
「戰爭に出るからにやどうせ生きて歸れようとは思ひません。生きて歸りたいと思はぬではないが、恐らく敵彈が生きては歸さないでせう。」かう云つて彼は聲をつまらしたのである。『どうせ死ぬと決まつてゐるもんなら……』
「さうさ、無論、死ぬに決まつてるね」と俺は云つた。「何しろ要塞攻撃だからね。一分間六百發も出る機關銃がつらつと並んでるところへ、突つ込め！　突つ込め！　と演習の要領でやられるんだからぬ。呀つと叫んでぶつ倒れた時は、「全身蜂巣銃瘡」つてやつさ。からだ中にポツポツ穴をぶち明けられて、眼も鼻も口もなく、めちや〳〵になつて了ふのよ。そいつを高粱殼を積み重ねてぷす〳〵いぶした中へ放り込んで灰にしてくれらアね。
「どうだらうね、その彈丸をからだにぷつぷつ打ち込まれた時の氣持は？」　内田が心細げに訊く。
「さア、どんなものかなア。もう少しの辛棒だ。直ぐその經驗は出來るよ」俺は自分でも餘り好い氣持はしなかつた。さういふ經驗はしたくなかつたのだ。で、俺は話頭を變へて云つたのである。俺は馬の屠殺場を見たがね。働ける内一杯を鞭て引つぱたき引つぱたき働かして、もうよほ〳〵になつていざ役に立たないとなると引つぱつてつて、ほかんとやるんだね。俺は見てゐて、實際、その持主を憎く思つたね。俺が若しその馬だつたら、そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こてうんと暴れて、先づ第一番にその主人——持主だね、そいつを蹴り殺しちまふね」

內田はその時默り込んで了つたのである。何を思出したのか、如何にも感に耐へぬやうにや沈思してゐるか、暫くするこ口を開いたのである。

「その馬が、だね。若し逃げられたら逃げてごこかへ行つちまへはい丶んだね。」

「勿論さ。逃げるのが本當さ。最も正しいのさ。ため〳〵こ殺される奴があるもんかね。そりや、逃げたら人間共は勝手なことを云ふだらうがねー。今まで何不自由なく飼はれてゐて、恩知らずだこかなんこか云つてね」

そんな話をしながら內田こ俺は昨夜枕を並べて寢たのである。そしていざ出發こなつて起きたら……內田はゐかつたのだ。

なふだんの演習の時こは違ふ。一人ぐらゐ兵隊が逃げようが不足だらうが、聯隊はぐづぐづしてゐられないのだ。俺達を屠殺場へ運ぶ列車はフーフー白い息を吐いて、停車場に待つてゐるのだから。

停車場の灯がチラ〳〵見へ始めて來た。影繪のやうな隊はやはり默々こして進む。

俺は內田の影像に向つて云ふ。

內田よ、ごうか健やかに細君を連れてごこかで暮してくれ。——（完）

論叢

無宗教者の宗教観

三和一男

一

近代に於て、科學は異常な發達を遂げた。殊に自然科學界の一大躍進は、瞠目に値する程であつた。これに比較すれば社會科學の進歩は聊か立ち後れて、同日に論じられない程度にある。とは言へ、これは比較的の問題であつて、輓近發達せるあらゆる科學の强き光輝は、從來神秘の殿堂奥深く祀り込まれてゐた一切の迷妄をば、夜の幕が揚げられた黎明の景色のやうに鮮明に描き出すに至つた。

併しながら、前言つた通り、社會科學に屬することは、例へは、雷神が囚はれの身となつて、一個の原動力に化せられ、利用されて近代的機械に繋かれてゐるやうに、自然科學に於けるやうな素晴らしい變革は蒙つてゐない。早い話が、今、僕等の同胞は正月といふものを祝つてゐる。門松、〆め飾り、煮蘇……等でこの新年といふ一つの『時』を神秘化してゐる。『初日の出』といつたつて勿論特別な日の出ではない。鬼に攻くれるやうな怱忙な大晦日の『初日の出』と大した變りはない肉眼的には全然變化が認められない。だから今この新年といふ『時』を便宜上二た月後らして三月一日にした處で、半年後らして七月一日を正月元日にして見た所で、或は全く廢して了つた所で何んでもないことである。毎日ある黎明とか日沒とか程の變つた現象さへもない悠久なタイムの連續のある『時』を祀り上げたに過ぎない。他人の誕生日を祝はされることがあつても自分が偶然この世に生れ出た日をさへ浮か〳〵と生活に追はれて忘れて過ごす民衆にとつて、一體正月が何であるか！　それは古い時代に於ては、半期間の貸借關係を決濟して、ホッとした輕い氣分の祝ひ心であつたとしても、現代のやうに月々大晦日をやつてゐ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る、否、毎日々々來る日も〳〵晦日氣分大多數プロレタリアトにとつては、全く意義のない事となつて了つてゐる。

今僕は正月のことを論じて、正月の儀禮廢止を高唱しようと目論んでゐる譯でないから、この邊で止めるが、正月の東京の街を歩いて、數十萬の戶毎に松や竹を空しく枯らし、郵便配達夫に過重の負擔を課しながら、徒らに千鳥足で幾日も〳〵空費する人々を目の當り見、これが全國的に行はれてゐることを考へる時、一良なきを得ないのである。しかも、近代的教養のあるインテリゲンチアの中の多くがなほ、これを馬鹿々々しいと思はないで、却つて『緣起ものだから』といふやうなことを言つてある信仰を持つてゐるのである。これ等は社會科學の未だ充分發達普及してゐない極めて卑近な一例ではあるまいか。兎に角、かゝることは將來その發達普及に從つて消滅し行く可きものと考へられる。しかも今日に於てなほ、自然科學の方面に於ける討究の自由は非常に擴張されてゐるが、社會科學の方面は、未だ支配階級の功利的目的の爲めに、甚だしい拘束と壓迫とを受けて、遺憾ながらその自然の發達を著しく阻礙されてゐるのである。併しながら、かゝる人爲的壓迫によつてその發達が阻止されるものでもなく、又支配階級自身の教育政策が皮肉にも一歩々々その發達普及を助長しつゝあつて、社會科學の威力も日一日とその光を增しつゝある現狀である。かくて宗教も今や漸く現代人に無視されようとしてゐる。

二

恐怖は宗教の母である。チンパンれイや猩々は蛇を恐れ、これを全能なる神と見て崇拜する。ゴリラやギツボンは大氾濫をもたらす雨水、破壞的の雷電や暴風を畏敬する拜物教徒であることは探撿家の一致する見解である。未開の蠻人の間にかゝる宗教的信仰の現存することも同樣である。

されば僕等の祖先たる原始人類の間にも、太陽の出沒、月の盈虧、星の明滅等の、認識し得べき存在と共に不可認識的存在のあること、又風の如き不可視的威力の存在すること等の確信が恐怖を誘導して。その難を免れんが爲めに、不認識的、不可視的存在に對して祈願をこめるといふ宗教的信仰に導かれたであろうこ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とは、認めない譯にゆかない。これ等のことは、たゞに蠻人や原人の間のみのことではなくて今日なほ文明人と稱せられる僕たちの周圍の老人や無智なる人々の間にすら痕跡を明かに止めてゐる事實である。

恐怖は宗教の母である。しかし、子が母でないやうに、オタマヂヤクシが蛙でないやうに、宗教は既に恐怖ではない。宗教的信仰は人を安心に導く。この安心は人の探究心を阻止する。かくして宗教は人類を誤らせた。即ち宗教は來世の幸福とそのイリユージヨンを抱かせる。更に詳言すれば、現世に於ける現實の苦惱、不幸に正比例して來世に於ける天國、極樂の大であることを確信して、只管永遠なる觀喜、法悅に對して、この世の一切の苦痛を耐へ忍ばせるのである。

三

宗教の發達を觀ると大體、自然力の崇拜から靈の崇拜へ進んでゐる。

太古の曚昧未開人は物神、動物を崇拜した即ち、太陽、月、星、天、電光、火、山、川、木、動物等を崇拜した。これらのものが、神變不可思議の魔力を有する驚怖すべき神體でないことが、朧げながらわかつて來ると、その信仰は薄れて行き、或は觀念上の靈たる造物主の崇拜とか、或は現實の人間の精神が萬能力を有するものとして崇拜されるやうになつた。

宇宙は靈妙不可思議なものである。萬能の造物主の御心のまゝであつて遂の人間の覗ひ知るを得ないものである。靈妙驚く可く、不可思議怖るべし、たゞ不可解なものと觀念して總てを萬能の神に委ぬべきものであるとの悟得に達する。又、人間の精神も奇異な理解し難い多くの現象を生む。その中に生ずる樣々の抽象的觀念は一體何物であらう? これ亦不可解なもので、結局地上の物ではなく天來的、神秘的な崇高な不滅なものだと考へる、かくて物質や肉體は賤しい存在であつて、靈とか精神は崇高嚴肅なものであるとの信仰に導かれる。

× × ×

今日宗教の敎派の別は幾百種あるか知れない。而かもその多數の宗派が各、皆自分の宗派だけが眞の宗敎であると稱して互に他を排斥しあつてゐるのである。そして各々自派の擴張に腐心し、死後の天國とか地獄

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を說き無智なる善男善女を欺いて寄進を奬め自家生活の資を得てゐる。

併し近代に於て、宗教に歸依する者は漸く減じ、又近代人は宗教的信仰の熱度に於ても漸次冷却しつゝあつて、歷史的宗教はその莊嚴なる儀式と共に過去のものと化しつゝある。

勞働者をして利害の觀念を誤らしめんが爲めに工夫された心理的方便は、各時代の經濟組織に從つて變化する。財産制度の進化を奴隸經濟農奴經濟、賃銀經濟の三形態に分つと、これに應じて弱者をして搾取に默從せしむる動機に三種がある。古代に於ては恐怖、中世に於ては宗教、近代に於ては輿論これであるとロリアは說いてゐるが、たしかに宗教は中世の遺物である。今日の教育が次第にその範圍を擴張し、內容を改め行くに從つて遺物たる一切の宗教は葬られ行く運命を持つてゐる。

四

要するに、莊嚴なる儀式で誤魔化さうとする在來の宗教、迷信的信仰に導く在來の宗教、難行苦行を強ふる禁欲的な宗教、悲觀的、退嬰的、隱遁的な在來の宗教――かゝる歷史的宗教の存在は無用有害である。僕等新しき時代の青年は虛飾の生活を排して有りの儘に生きなければならない。理知の敎ふる正しい生活を營まなければならない。本能を抑壓する代りに創造的活動に向はなければならない。人生は愉悅に滿ち希望に輝いてゐる。

天國や地獄はあの世ではない。この世だ。僕等プロレタリアートはこの地獄の現世を天國になさねばならぬ。この希望を持つて力強く進まねばならぬ。世界は僕等の世界である。僕等の作り出す天國はまた僕等の天國である。

―(一九二二・一・八)―

プロレタリアの文學

上

吉田金重

思想を加味した文藝上の作品が、傾向小說だなどと言ふ、特別な肩書を附せられたのは、それは既に過去のことである。隨つて今の文壇に社會文學、勞働文學

と言つたやうなお座なりなものが存在すべき筈がない。然るに思想と言ふものに對して迂な、時代に言ふものに對して鈍な、あり來りの批評家、作家達は自己の貧弱な頭腦を蔽はんがために途徹もない言葉を作り出して、自家擁護の説を飛ばすのである。何と言ふ愚劣なことであらう。

ところが勞働者上りのある作家の如きは思想的頭腦の不徹底さにもよるが、さうした言葉に對して一種の恐怖を懷き、自己辨明を極力やるのである。而して如何にしたらば現在の文壇と言ふものに接觸出來るかへ(いや接觸してゐるのかも分らない)妥協が出來るか、藝術家としてより多く得ることが出來るかと腐心してゐるのである。而己ならず、自己の思想的內容の貧弱なる作品を辯解せんがために、技巧の主張を力めるに至つては、滑稽も極れりである。なるほどプロレタリアを題材にした作品に、より新しい技巧は必要に違ひない。だがそれは單なる技巧である。技巧にのみ趨つて、それによつて內容を胡麻化す理由はないのである。作品の上に虛僞な小細工をこらし、作僞をなす如きは新興藝術を主張する者にとつて、尤も忌むところである作品の上にアートをこらすなぞは、多くはディレタントをこらすなぞは、多くはディレダントの取るところであつて、骨を碎き肉を削り、血を絞るが如き思ひに原稿用紙に刻みつける者に取つて、どうしてそれらのことに頭を痛めてゐられやう。小説とか戲曲と言ふものが特に、藝術家と言ふ劃られたる社會にのみ弄ばれたのは過去のことである。作家が原稿用紙に文字を書く姿は、職工か工場でハンマを打ち振るの姿でなければならぬ。某理學博士の如く、晝寢の代りに書くやうな小説は、其の出來榮が如何にあらうとも、民衆に取つて何の價値があらう?

下

過去の露西亞が時代の要求に駈られてゴーゴリ、トルストイ、ドストーエフスキー、ゴーリキー、アルツイバーシエフ等の作家を生んだかとて、それに對して其の當時の文藝批評家達が遇するに、なぜ社會文學者、勞働文學者と言ふ特別の名を附せなかつたあらうか! なるほど彼等は思想の上に於て藝術の上に於て彼我の比較を許さない偉大な天分を有してゐたに違ひなか

らう。だが彼等が、時代と言ふものを背景に、其の偉大さを示したと言ふことも言ひ得らる、のである。其の思想的天分を恣に藝術の上に表現したと言ふことに、一歩を容喙する餘地はないのである。まつたく彼等藝術家である。と同時に、堂々たる一個の社會運動家であり、革命家であつたのである。これを以て當時の文藝批評家、時代の先覺者と稱するほどの人が、偏見の眼を以て見、侮蔑を與へたらうか？

時代の要求がルネサンスを叫びクラシズムが生れロマンチシズムが起り、それがナチユラリズムに代るに何の不思議があらう。之らに時代思潮の主張、傍流はあらうが、別に社會文學者、勞働文學者と稱する特別のものが出て來る筈がない。たゞ作家の頭腦が、どの程度まで思想的に敏か、迂かと言ことが圖られるのみである。そこに藝術上の内容問題を起つて來るのである。と言つて文壇上に自然主義系があるとか、唯美派かないとか言ふのではない。併しこゝに言ふところは藝術のための藝術ではなく、技巧と形式上の作品ではなくまたディレタントなブルジオア文壇ではなく、人生のための藝術、内容と實感の作品、プロレタリア文壇と言ふものが、如何なるものであるかを明かにしたのである。

相縁奇縁

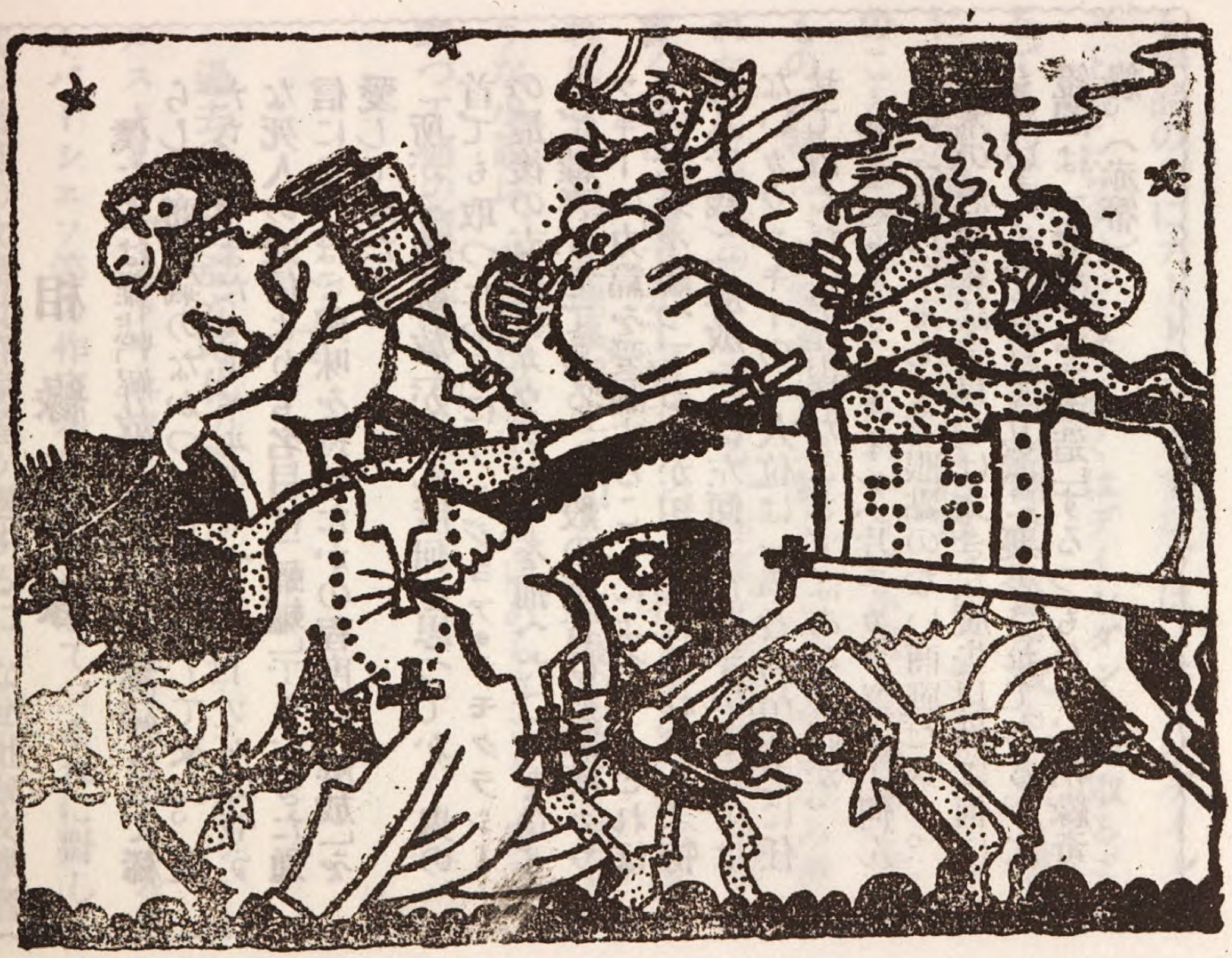
僕たちは雜誌「解放」のかうした雜誌として稀らしく商賣氣のなかつたことを愛して來た。僕たちは、またエーベルトやヘンダーソンのやうな死人の通信よりも名目は「蝙蝠」でも生きた通信にどれほど興味を持つたかの程度に「解放」を愛して來た。

所がその「解放」がこん度何を思つてか、鬼の首でも取つたやうにブルジョア・デモクラシーの最後の支持者カウツキーを捕へたことをひとりで糠喜びしてゐる。一般の讀者は變節漢カウツキーの力篇を愛誦することによつて、どれほどの光榮を賜つてゐるか知らないけれども（特價八十錢）「解放」には左傾した若手のないではないカウツキーの一人位は一學者高畠素之に任せて置くだけで結構なことではあるまいか。

片やベルンシユタイン、片やカウツキー何んといふ皮肉なそして着眼點のない商戰だらう。日本の思想雜誌の良心は大きな廣告以外に何にもないことがこれで立派に裏書されてゐる。大鐙閣は「解放」を「改造」するつもりか、相縁奇縁。（赤帶）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（坊主共睾丸を奪る）



（平たんな人生路上）

批評

三つの社會主義雑誌を讀みて

種蒔きの新年號はまたやられた。併しその代りに吾々の先輩によつて「前衛」が出たことは喜びだ。山川均の「當面の問題」は何といつても新年號の中心讀みものだ。彼の投げかける鋭い斜光に依とまるで變つた有り得べからざる世界が現出するから妙だ。ブルジョア社會がでんぐり返つて醜悪と遣り繰り算段の背中を見せる。その背中のぼろを指摘する手際は彼の獨壇場だ。堺利彦の「精神主義と潔癖」は温情主義善人主義安價理想主義に唯物史觀の冷水を浴びせた形だがもう少し水の温度を下げて貰ひたいと、思ふ所もあつた最後の無遠慮主義をつまり徹底さして貰ひたいのだ。稲村隆一の「農村運動と社會主義」これはたゞ事實を親切に書いたもの。インターナショナル、ノートは世界の無産階級運動を一目に見せるいゝ記事だが、さて日本は………と少々悲觀させる材料ともなり、これからだ……と責任感を刺戟する材料ともなる。大急ぎでこしらへた初號は實の所少々失望させぬでもなかつたが何しろ兵站線を絶たれた敵陣ではさう自由には働けないからまあ〳〵これで大出來だ。但し紙質が厚すぎて少々重苦しいもつと紙質を下等にした方がいゝ。だがこれは精神主義者の潔癖かな？

次は「社會主義研究」——前者の兄弟分だ。賀川豊彦君が遠吠へそしてボロを出した。山川均がボロの分折そやつてゐるのが「社會主義と商業主義」だ。去年の六月號程精彩はないが一讀の價値はあるけれど理窟でゆくとまるで相撲にならぬ。山川がわざ〳〵二度も手合せしたのはたゞ〳〵賀川が勞働運動の指導者であるといふ事實だけの爲めだことは勿論だらう。賀川は自由社會だの自由交易だのと無茶を言ふ自由を有し、勞働運動指導者となるの自由を有してゐるが、山川にはどちらの自由もないのでかあいさうだ。吾々も賀川式自

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

由黨になる自由のないのを遺憾とする。序でだから言つておくがこないだの讀賣新聞で關東と關西の都會の樹木や女の顏などを比較した賀川の美文に矢張り自由交易の讃美論があつたと記憶する。尤も手元にないからはつきりその文章の中であつたとは言ひかねるが。

最後に「社會問題研究」を一瞥する。これは但し一月號はまだ出ないから十二月だ。これには「改譯賃勞働と資本を公にするに際し福田博士に答ふ」といふ興味ある文獻がのつてゐる。勿論河上肇の執筆したものだ僕は福田博士の「マルクスの眞本と河上博士の原文」といふ論文の原物を見なかつたので何よりこゝに再錄された福田の論文を面白くよんだ。これを讀んで胸を惡くする程女性的でなかつたので面白く讀んだのである。日本一のマルク大學者の論文は違つたものだ。併しマルクスの精神だけは學びかねたと見える。マルクスによれば社會科學の最後の言葉は眞本と原文の鑑別ではなかつたことは「哲學の貧窮」の最後でわざ〳〵彼がことはつてゐる。福田博士は一つ資本論のマルクスのノートをさがして學間研究の材料とさるべきだ。エンゲルスの編纂した資本論に宣傳的修正なきにこを誰か保證し得んや。（初之輔）

早く『文明から逃げ』ろ

先般、『時事』の文藝欄で、上司小劍氏の『藝術は文明から逃げる』を讀んだ。それは實に陰險そのもの、老獪そのものとも云ふべき文章であつた。御自分では、今の若い連中が文壇の破壞だとか、藝術の革命だとか云つて、聲を大きくし出したのに對して、ユーモアーの積りで書いたのかも知れないが、さうだとすれば、それは全くユーモアーの墮落である。陰險である。『藝術は文明から逃げるものと見える』と云ふ言葉を、クロポトキンのものとして見る時、我等はそこに一種のユーモアーを感じることが出來るが、上司氏のものとして、尠くともあゝした好い加減な不徹底な上司氏自身の生活態度に對する自己辯護的意味のものとしては、厭味にはなるが、ユーモアーにはならない。こんな好い加減な不徹底な厭味な態度で、小說を書いたり、藝術を製作したりするのだから、小說が墮落し、藝術が退步するのだと思はずには居られなかつた。そして、そ

れだから僕等は、こんな末流小説や低級な藝術の面臆もなく跳梁跋扈する文壇を破壞して、藝術の革命をやる必要があると思つた。藝術が文明からでも野蠻からでも、逃げたければ勝手に逃げたら好いだらう。なにもクロポトキンをだしに使つて、如何にもさうする事がえらさうに思はせ振りを云ふには及ばない。クロポトキンがさう云つたから、俺もさうだと、烏が鵜の眞似をするにも當らない。

『――兎に角、今の樣な世の中では、眞の大きなえらい藝術は駄目だ。クロポトキンは云つた「藝術は文明から逃げるものと見える。」と』、これが上司氏があの文章に依つて發表しようとした意見の眼目であるらしいが、『眞の大きなえらい藝術が駄目』な樣な世の中は野蠻だとは云へるにしても、決して文明とは云はれない。だから、斯う云ふ世の中から逃げることは、「野蠻から逃げる」とは云へるにしても決して文明から逃げることにはならない。上司氏が若し思はせ振りを云はない正直な人であつたら、『藝術は文明から逃げる』なんか云はずに、もつと卒直に、『藝術は野蠻から逃げる』と云つたであらうと思ふ。そして事實、上司氏の藝術は、今の所、何ら贔負目に見ても『野蠻から逃げる』に相應しいブルジョア藝術であるのだから、正直にさう云へば、それで僕はこんなことを書く氣にはならなかつたのだ。

併し、それにしても、上司氏を假りに一個の藝術家とすれば、藝術家としては、餘りに非藝術的な不徹底な卑怯な言ひ分であることは免れない。何となれば、生活が十分文明であれば、我等には藝術の必要はないのである。生活が十分文明であると云ふ事は生活が藝術になり切つた狀態を意味するのである。詰り、生活が野蠻なものであるからそこに生活に藝術なるものが必要とされるのである。生活の野蠻に對する反抗から藝術が生れるのである。野蠻なる生活に對する反抗、言ひ換へれば、野蠻なる□□、□□、□□、□□、□□、□□、等に對する反抗、――實に藝術はそれ以外の何物でもないのである。而して反抗の隣○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○でない一切の藝術は、何物にか囚はれたる奴隷藝術の名を犯

したる藝術である。

今、上司氏の藝術は野蠻から逃れる藝術である、而も本來の藝術は野蠻に反抗すべきものである。上司氏の藝術が藝術の名を犯したる誤魔化し藝術であることは呶々を要しないが、さもまことしやかに『藝術は文明から逃げると』云ふ樣なことを云つて、厚顏しくも、クロポトキンなどを引合に出して、勿體を付けて居るから、默つては居られなくなる。引合に出されたクロポトキンこそ、好い面らの皮であらうと思ふ。それよりも、『俺の藝術なんか、實際、下らない誤魔化し藝術なんだ』とフランクに云つた方が何の位ユーモラス、に力強く響くか知れないと思ふ。上司氏位の我が文壇に名聲かくれなき大家が、『俺の藝術は實際下らないんだ』とハンブルに云つたからつて僕等は決してそれを文字通りに解釋して、君一人の罪にする程、早計な者ではない。君がさう云ふ時には、今の資本主義の文明に反抗しないか或はそれから逃げるかして居る我が文壇の所謂大家連は、勿論君と同罪である。否、君か正直にさう云へば、その事實を意識しないか、意識してもそれを糞を擁しに匿して居る卑屈で狡猾で漁夫の利に有り付いて居る大家共よりは、はるかに藝術家として藝術的良心の存在を買はなければなるまい。

所が、事實は野蠻から逃げて居るのだ癖に、文明から逃げると云つた樣な美辭の下に、讀者の眼を誑がさうとする狡猾さに至つては、默つて居る人達よりももつと下劣である。そんな大人氣ない幻稚な技巧には、今時、餘程低能な文學青年でも、誤魔化されはしまい。

『今の社會をこのまゝにして、文壇だけを破壞し、藝術だけに革命を起されることは、斷じて出來ないと言つてしまつてもよい』と上司氏はをつかなびつくり斷定を下して居るが、一體、今の社會をこのまゝにして文壇だけを破壞し、藝術だけに革命を起さうと志す樣なドヂが何處に在ると、上司氏は思つて居るのであらうか？社會主義の事は誰よりもよく分つて居るだらうと、今迄私かに敬意を表して居た僕も、これですつかりそのイリユージヨンが消えた。平生、社會主義者が好んで標榜する社會の革命とか制度の破壞とか、云ふ事は、之を實際の問題として見れば、餘りに一般的で、餘りに抽象的に過ぎる。それとも、上司氏位の大家になれば、事實に於て、社會の革命とか制度の破壞とか

云ふ爲事は、朝飯前に、掌を覆す様に容易く出來るのだらうか？ 出來るものなら、君の創作全集を買ふより、もう少し餘計に金を出しても好いから、やつて見せて貰ひたいものだから、玆で序でに賴んで置く。

君の法で行くと、小作人や職工の勞働爭議も、そんな社會の一部分の小競合ひをしたつて革命は斷じて起るものではないから、止せ〳〵と云ふ事にもなりさうだ。斯う云ふと、君が如何に社會主義の假面を被つたブルジョアであるかと云ふ事がハッキリして來るが、何としても、君がさう云ふからには君のブルジョア意識が（たとへ、それは無意識的にもせよ）さう云はせたと云ふ事は、隱れもない事實である。

僕等の頭で云ふと、今の資本主義の社會に於ては（君の様な、原稿料がしこたま入つて、使ひ用がなくつて、今に革命が來るまで、君の豫言？に依れば向ふ五年乃至十年間位、まあ、手を結んでヂットして居ても食つて行かれさうな位に貯金でもしてあるかもれ知ないブルジョアは別として）、彼が無產者である以上、藝術家も職工も、同じ環境の下に置かれてあるのである。**職工が何か物品を製造して、之を商品として、市場へ提供する事に依つて飯を食つて行くのも、藝術家が何か作品を製作して、之を商品として市場へ提供することに依つて飯を食つて行くのも、ブルジョアの奴隷である點に於ては變りはない。**今の無產者の誰れが、斯かる奴隷的境遇から脫却し得る者がある？ プロレタリヤの藝術家が、職工と比較して何の藝術家面ちがあるか？そこでは職工も藝術家も等しく製作呼のマーケット・プライスが、藝術的價値ではなく商品的價値が選擇の評價の議論の中心となるではないか？技巧の上手な職工の作品が勝れた市價を有する様に、技工の上手な藝術家の作品が優れた市價を有して、それが藝術の壇上に優越的地位を保有すると云ふ丈の話ではないか？ 而してその市價の優劣如何に拘らず、資本家の奴隷たるに於ては同一である。斯かる淺ましき奴隷的境遇に 職工は公然反抗し、憤起した！ 然るに、藝術家は女々しくも、井戶端會議式に、陰密に反抗し或は憤慨する者はあるけれども、藝術の美名に於てすら、公然とその反抗を提起する者は、二三を出でないではないか？何と云ふ腑甲斐のない僞善的な藝術家共であるか？ **實に職工こそ眞の藝術の表現者である。**

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

所謂藝術に囚はれたる鈍感なる藝術家共よ、早く文明から逃げて彼の勇敢なる職工等の歩める生活の表現の跡を追つかけて行け！腰拔けな君等には追從さへしどろもどろな體爲ではないか？

我が文壇の大家、上司小司小劍君、現に君は文壇の破壞藝術の革命を否定することに依つて人間として及藝術家としては尙更、如何に君が職工以上の劣等な人種に屬するかを偶々曝露したのである。君が文壇の腐敗藝術の墮落を惡罵するのは好い。けれども。それなら、何故、君は今我が文壇が腐敗し、藝術が墮落するかを考へないのか？文壇の腐敗、藝術の墮落は、直ちに、文壇の破壞藝術の革命を意味して居るではないか？文壇の腐敗、藝術の墮落をあれほど痛切に認識して居る君が、何うして文壇の破壞、藝術の革命を叫ばずして、却つてそれの不可を主張するのか？それよりも、藝術家たる君が何故に、自ら先づこの事實に向つて突進しようとしないのか？文壇の腐敗は何よりも先づそれの破壞を爲す者がないからではないか？藝術の墮落は何よりも先づそれの革命をやる者がないからではないか？

そんな事は藝もないから、もう五年俟て、十年俟て——まあ、それまでには、君も詰らない通俗小說でもウント書いて、貯金の殖えるのでも樂しむか——それは利口の樣だが、藝術家としては餘り面白くもない。寧ろ馬鹿司の證券見た樣なものだ。（光造）

我國文壇の光榮

宇野——芥川——室生

芥川氏の『將軍』、室生氏の『錢屋五兵衞』、宇野氏の『屋根裏の戀人』——この三つは何れも改造新年號に載つてゐる。そして僕がこの三つを選んだ理由は、一番手近かく改造が手に入り、改造のなかでも他の作家達のものより、比較的短かかつたからと云ふだけの事で、特別に日本一のブルジョア雜誌であり、且つこれらの三氏が日本文壇の花形であるからと云ふ理由からではない。

先つ『將軍』から取かゝる之れを唐人の技巧を借りて言へば、咳唾悉く玉を爲すとか形容されるに値する技巧の冴えと、ひねり出す所悉く稀代の珍品であるとか

のやうに賛嘆されて、文學好きの青少年から渇仰の目標のやうにされて居る芥川氏の作品であるが、僕はこれを讀んで些かも感心しなかつた。運悪るく逸品でなくして愚作悪品であつたのかも知れないが、若しさうなら、その不幸不運は批評される芥川氏ばかりでなく批評の役目を引受けた僕自身の不幸でもある。日露戰役中へ旅順包圍軍中の乃木將軍を主人公にした「將軍」と云ふこの作は、嘗て有島武郎氏が神尾將軍を主人公とした『凱旋』と云ふ愚作を發表したが、この將軍はそれにも増した愚作である。これで心理描寫が深刻であるとか技巧が冴えてゐるとか言つて現代日本の天才ででもあるやうに思つてゐるのなら僕は芥川氏の愚作に呆れるより先に寧ろこんな愚作に感心させられてゐる我國の讀書階級の愚かさに呆れる。故泡鳴がメレジコウスキイの三部作を評して高等講談だと云つたが、これはまた高等講談にもなつてゐない淺薄さだ。もうこんな作文程度のものが、日本の文壇から隱居したと云つても決して我國の文壇は寂寥を感じはしない。

作文と云へば室生氏の『銭屋五兵衛』も同様の程度だ。ただ文字さへ書きならべて置けば藝術だと思つてゐられては、それを讀ませられる吾々が救はれない。芥川氏の作には淺薄な常識きりのものではあるが、まだそれを強いて意味あり氣に見せ懸けやうとした、下手くそな努力を買つてもいゝと思ふが、室生氏に至つては、それすらもない。何の爲めに書いたのだかあつても無くてもいゝ作品だ。こうなると批評の域を超越して、この作を日本一の大雜誌の新年號に麗々しく掲載した改造社の、山本實彦氏の勇氣を賛歎せざるを得ない。これなぞは確かに後世になつて、中學國語讀本にでも轉載せられべき好運を有する國寶である。

ところで最後に宇野氏の『屋根裏の戀人』である。芥川、室生、宇野の三氏のうちで、最後の宇野氏だけが兎も角もモノにになつてゐる。僕は芥川、室生二氏とは違つて宇野氏には或程度まで天分を認めてゐる。そして兎も角も現文壇の花形中で、モノになつてゐる作家は宇野氏一人きりだと思つてゐる。いかに里見氏が天下の權を握つた樣な積りでゐても、芥川氏が文壇王國の主權者だと思つてゐてもそして世間の有象無象がそれを承認してゐても僕だけは否と答へるに躊躇しない。そして宇野氏をそれからの作家の上に据えるものであ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。（一時我國の文壇に、里見の天下か、芥川の天下かと云ふやうな語か流行したと思ふが、そんな愚にもつかぬ語は多分は宗鞴のた丶いた野太鼓だらう）。その宇野氏とても、もう僕等とは緣が遠くなつてゐる。畢意は落日の餘照に過ぎないもので、これは玆に改めて僕が云ふ迄もなく、宇野氏のお手習ひの大師匠さんは露西亞のゴオゴリであるが、ゴオゴリの天才と深刻さと愛とは、何としても先生と生徒の相違で、宇野氏はゴオゴリの足下へも寄りつけない。殊にゴオゴリが露西亞庶民階級に對して灑いだ燃えるやうな愛の力は、宇野氏には全然缺けてゐる。それが爲めにや丶もすると宇野氏の作品は落語に隨して終ふのである。その例は世間週知のことで可成り數多く發表した氏の作品中頻々と指摘し得られる。『屋根裏の戀人』にしても宇野氏の精進力が足らぬ爲めに、却つて反感を持たさしめるやうな點が無いでもない所詮は宇野氏もブルジヨワの作家であり、その作品はブルジヨワの玩弄物として終るに過ぎない。今日から百年も前に生れたゴオゴリの作品は、今尙ほ僕等の胸に生きて感激せしめるにも拘らず、現に僕等と同じ地上に同じ時代に生存しつ丶ある宇野氏の作品が、最早や僕等の胸に共鳴しないと云ふ事實はいかなることを意味するのか。

僕等は餘りに遲くれ過ぎたのか？

それともまた、餘りに進み過ぎたのか？

しかし、この如き宇野氏をすらも、芥川氏や室生氏や其他の諸作家と比較した時に、これを我國文壇の首位に据えなければならぬと云ふ事實は、完く日本現文壇の光榮さを何よりも雄辯に物語るものである、妄言多謝　逸平）

小説　俊寛

芥川龍之介——中央公論

平・源、北條、足利、……織田、豐臣、德川、明治、——あ丶丶あ丶。有王のことで御座いますか。有王ならば只今眼は醒すところで御座いますが、隨分永く寢たものと見えますな。

私が眠つてゐるからと思つて、耳元で琵琶法師どもの騷々しいことで御座つた。い丶加減な造へごとの文句をかき列べて、併もごら聲あげてやりますわ、やり

ますわ。折角の安眠、それごころかい、夢見の最中を、――惜しいところで御座つた。だが、今度の琵琶師は大分こ咽喉もよし、品もありますな。それに俊寛樣のこゝも大分こ調べたやうで御座りまするな。それだけは見上げたもので、若いに似合はぬ物識りで御座るな。それは〳〵、前の琵琶法師ごもより善く唄ひましたわい、だか、隨分こ茶目氣のある琵琶法師ですな。それは、それこの有王が證明いしまするで。この法師は敎養を誇る法師で、あなた方のやうに寺小屋にも行つたことのない下賤の身には、シミの程度が一致しませぬわい。貴族こ、穢多非人の差ぢや。たつた一つ、あなた方こ合ふところがないでもないかな。この法師、敎養を誇るに似ぬ茶目氣があつての、殿上人の間では下着に襟をつけたが意氣ぢや位るは、下賤の身かの雲上人になり度がつてゐる不必存物に敎へないでもないからの。其處が、その茶目氣があなた方こ一點、それもほんの少しばかりだが、シミの合する處ぢや。

――おや〳〵、あなたは西洋人の脫け殼を着て、足には野獸の皮をもつて製したるところの襪なものを穿いてをりますな。――たや〳〵、人間がうよ〳〵居ますこゝ。こりや珍らしい。俊寛樣の生きてをられる頃は、そりや人數も少なかつたし、呑氣なものでごわした。京の都こいつても、人こ人こ噛み合ふやうなこごは滅多にごはせなんだっ 自動車、ほおあれはよく走りますな。黑い煙を吐いて行くものは、あゝあゝあゝあれは汽車いふもので御座るか、二日二晩かゝれば三百里も四百里も走る。ほゝほゝ。今の世は忙しいもので御座いますの。向ふに、脊丈の高い、紅ら顏の男が行きますが、あれが成程西洋人で御座るか。日本の交際も仲々廣くなりましたの。俊寛樣の頃には、琉球まで行くのには、今の西洋へ行くよりも遠くへ行くやうな氣で騷ぎましたぢや。水盃はおろか、淚こ共に別れを告げたものて御座るが。あれ〳〵、黑い煙を吐いてゐる大筒の下のうづ暗い家の中に、まるで墨を流したやうな顏をしてゐる人々は何で御座るかしら。はゝあれはプロレタリアートの職工。不思議なものです。な 十二三の子供もをりますな。二十一二の女の子もをりますな。誰か口髯を生やしたのが、一人を叱り飛ばしてをりますな。

今やつと眼が醒めたばかりで、欠伸をして終つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何分悪しからず。あそこにブリキで作つた長いものを提げて、威張つて歩いてをられる人は何ですかな。…………あゝ分つた。厳めしい人があればあるものですな。たや〳〵、彼處に美人が澤山をりますな。竿のやうなものを斜にしていゝ音を出してをりますな。その側で又若いのが踊つてをりますな。頭のつる〳〵光つて、でつぷりしたお爺さんが嬉しさうに眺めてをりますな。此方のほうではこれは又八ヶ間敷い。鐵砲を鳴らして、人殺しの眞似をしてをりますな。はて〳〵彼方の大きな建物、佛教山救世寺の中では面白いことがあつてゐますぢや。先づ有王が指す方を見て御覽じろ。釋迦如來の難有き御教へを聞いた歸に、穿き物を穿き違へて歸つて行きますぢや。あの人は來る時には切れかゝつた駒下駄であつたが、歸りがけには新らしいのを撰つて穿いて行きますぞ。

——有王はて、はないこの私といふものはぺら〳〵と喋つてばかりゐまして、俊寛様の大切な傳言を忘れて終ふところで御座つた。大切な〳〵傳言で御座るで。これだけは忘れられませぬわい。その前に一寸一杯御飯を頂きませうか。ひもじうて〳〵。……俊寛様は常に申してをられました。有王はそれをよく憶へてをりますので、まあ俊寛様のお話しの恰好に出來るだけ似寄るやうにお話しいたしませう。

何時の世の琵琶法師にも二つの型があるやうぢやが俊寛様には何うも妙な癖が御座つての、五慾には迷ふことがあつても、三毒には冒されぬと仰つたが、それは成程々々身供にも合點の行かぬことも御座らぬ。其處で俊寛様は、身供の五慾三毒、それを琵琶法師どもが面白く話に仕組むでくれるのはよいが、今の世の法師どもは、智惠が餘つて行ひが足らぬと仰しやる。その智惠を小賢してのう。隨分と隅々まで智惠袋をしぼつてはくれるが、わしが考へてゐたこと、生活して來たことを語り出すまでこぱ、未だ〳〵遠く及ばぬと仰しやる。それよりも琵琶法師自身。身を以て浮世の風に當り、心を賭して困苦と鬪はないだらうかと仰しやる。今の世の法師共の常として。學んで後に行ふことを知らねはこれ尤も歎ずべきことだと仰しやる。これ常に末法末世の相であるぞと仰しやる。身を以て行ふことを知らぬものは。宗教に隱れるか、又は人の世を嘲罵するものぢやとおつしやる。琉球の島に流さる・

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も、困はこれ足下を正視したにある。現實の理非曲直と闘つたにある。成程女のもとに通つたは誠ぢや。だがそれも今言つたとほり迷ひでの、氣にかゝりながらの狂通ひぢや、女房から小言を言はれてばかりゐたのも不德のいたすところで、誠の足らぬところぢや、それに、實を言へば世の中にまんざら、未練のないこともなかつた。『世の人は案外わしの說に傾くかも知れない』程度の未練ぢや。人はそれ、社會共同の生活だからのと仰つた今の世は今の世として處すべき道あり。次の世には又次の世に處すべき新らしき道理がある。道理はそれ。その時によつて變つて行くべきものぢや。順逆縱橫のものぢや。書を萬卷も積んで、文章道の眞義に通ずることも、學問の士は須らく新らき道を趁ふべきものであるといふ、苦き闘い、淚の修業を忘れたならば、これ本來の修業でなくして、枝葉の修業のみぢや、とも仰つた。成程、俊寛樣の御代とは違ひ今の世は事々物々變つたことばかりで御座るが新らしき道とはよく仰せられたもので御座るの。はてさて、人は正直のやうで、又仲々に惡いこころのあるものぢやから油斷をすれば直ぐ惡道はびこり混亂又混亂、一刻も油斷のならぬこころぢや。それぢやからそれぢやから、人の子達は常に惡と闘ふことが必要となつて來るのぢや。あゝ思ふても〳〵、今の世の琵琶法師共のかき鳴らす調べは、咽喉はよくとも、品はあれども、俊寛の耳には小賢しい作りこと、しか聞えぬ。それどころか、俊寛の作つた琵琶唄は、もつと〳〵深みもあれば淋しさもあつた筈ぢや。それは俊寛自身ばかりが知ることであらうが。今の世の琵琶法師共よ、縱令ばそれは小さくとも、曲つてゐても、くねつてゐても、お前自身の唄が聞き度いものぢや。人の好みは時代によつて變る。佛陀の顏も代々の佛師の好みによつて變る。と仰つた有王それは未だぴん〳〵と生きてゐるわたくしで御座るぞ。有王は師の僧都から、常に左樣なことを聞いて御座つた。淚と共に別れる時も、お前は老いて終つてもう駄目ぢや、元氣も何も彼も脫けて終つた。お前はお前の生きてゐる周圍の世界を眺めろ。觀察しろ。それから始めて道に這入れ。いゝ唄が出來たら、たまには聞かしてくれい、さう仰つたぢや。

あゝあゝあゝ、——彼處の窓の立派な書齋では未

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たく〳〵琵琶法師がい、琵琶唄もがなと思つて、妙な本をいぢり廻してゐるぢやないか。（弘二）

讀んだ脚本二つ

菊池寛氏『時勢は移る』―中央公論。
中村吉藏『地　震』―解　放。

惡ジャーナリズムの醜い本體を臆面もなく、競爭的に曝け出した新年の諸雜誌の中で、別に深い理由があつた譯ではないが、菊池氏の『時勢は移る』と中村氏の『地震』とだけを讀んだ。この二つを選んだのは强ひて云ふならば現在の愚劣極まる雜誌小說よりも、たとへその愚劣さの程度に於ては同じであつても、自分がやはり小說よりは、より多く脚本に興味を抱いてゐるからであるかも知れない。

今、自分の手許には、解放も中央公論もない。この二つの脚本を讀んだのは十日ばかり前のことである。そして人物の名前などは、すつかり忘れて了つた。それ程讀んだときの印象が稀薄であつたのかも知れない。

人物の名前こそ忘れたが、この二つの作品の筋と思想は忘れない。二つとも所謂新舊思想の衝突を書いたものである。そして二つとも、この種の社會劇作者に共通なずるさ、すべてを頗る簡單に『時代』になすくり附けて了ふずるさを、ハッキリ表はしたものである。

愚を顧みず、敢へてドラマトルギイを云々するならば、中村氏のものはイブセンの骨組丈を持つて來て、それに少しのものも與へてゐないと云ふ點に於て、日本式イプセン劇であるといふ點に於て、全く成功の作であると云へやうし、菊池氏のものはアイリッシュドラマ風の技巧を縱橫に驅使して巧みに所謂『眞實眩覺』を起させる點に於てドラマトルギイだけの上から云へばこれまた成功の作であると云へやう。然し乍ら、玆で吾々が考へなければならないことは、今日の時代は最早イブセンの時代ではないといふことである。今日の日本は。アイリッシュドラマティストの觀たアイルランドではないといふことである。今日の時代はイブセンによつて暗示された時代ではあるかも知れないが最早彼自身の時代ではない。現在生きてゐるハウプトマンが、戰後の作品に就いては知らないが少

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くとも、彼が今日は、『日の出前』や『淋しき人々』の時代の彼ではなくなつてゐる筈である。

作品の技巧は内容と必須的に相關聯し、相變化するものである。然して作品の内容は云ふまでもなくその作品を生むだ時代の生活と切り放たれてはならない。生活は既に變化してゐる少くとも生活の基本となるものは變化してゐる。作品の内容が變化されるべきであるのは當然である。然るに、その容内によつて初めて生じて來る技巧のみが、劇の場合に於けるドラマトルギイのみが、獨り依然として變化しないといふ理由はない。縦にいつの時代にも共通なまた横に如何なる場合にも共通な藝術製作上の方式など、云ふものは有り得ない。このことは一個人に就いても云はれなければならない。個人の場合に在つてはその人の氣質といふものを無視することが出來ないだけに、多少は異つて來るが然し本質的に云へば同じものである。一個の作家が生きてゐる縦の世界と横の世界との變化に從つてその作家の作品の内容も亦變化する。そしてその内容の變化から必然的に技巧も亦變化する。

要するに、作品を技巧の上からのみ觀て批評するのは愚かなことである。これは分り切つたことであるが然も何故自分が、この分り切つたことをくだくだしく云爲するかといふに、それは今玆に云はふとするこの二つの作品が、二つともその内容から必然的に生れて來た技巧を以つて書き表はした劇ではなく劇とは斯の如きものであるといふ豫め規定してかゝつた彼等自身の技巧の中へ、偶々拾つて來た内容をも押しはめたものであることをそしてその内容を殺して了つてゐることを云ひたかつたからである。

菊池氏の『時勢は移る』は三幕物で、その序幕だけが發表されたのであるが、序幕が明治革命の前で、二幕目が明治十七年で三幕目が大正十一年なのだから、未だ發表されない。二幕目及び三幕目の内容もほゞ見當がつかないでもない。要するに新舊思想の衝突である。それ以上の何物でもない。がそれすらも、觀方によつては今日の吾々をショックするものがないとは云へない。それだのに、この作者は、この内容をざつきも云つたこの作者一流の技巧の中へ押しこんで、作者自身はほくそ笑んでゐる。横着至極なやり方である。横着な點に於ては、中村氏の『地震』も菊池氏のもの

に劣つてはゐない。これは一概に新舊思想の衝突とだけ云ひ切つて了ふことは出來ないやうな點もある。それだけに作者の横着さが一層目に付いて不快である。

×　×　×

今、これで恰度原稿用紙四枚半書いたのだが、不圖馬鹿々々しくなつて來た。といふのは中村吉藏だの菊池寛だの、といふ人の、當然亡び去るべき作物を、こんなにムキになつて云々するのは、するもの丶方が腑拔けではあるまいかと云ふ氣がして來たのだ。さう思ふと益々馬鹿々々しくなつて來たからこれだけで止す。（孝丸）

美術　『子供作品展』『民衆美術展』の繪について

小供性に附隨する無垢の奥、それは原始人ののびのびした美術心にも等しい。而し是等の子供が生活還境に至つては勿論原始的生活還境ではない。表現の純眞さに於ては同じ原始人のそれに等しくとも、是には既に原始的生活と相反した此の現實生活が周つてゐる。で無垢な原始的子供の美術心は生れながらにして呪はれたるものである。

けれ共一度個の强みによる大人の知的懷疑生活を經るに於て、社會的憧憬に基調された想像的美術は創られるのである。そして此の時、原始人の生活と美術心とが混一に於ける如く、現代の大人の想像的美術心が何等の矛盾もなく憧憬の原始的自由生活へと還元してゐる。此處は美術の根であり、無垢なる永遠の子供性である。

此の想像の美術は社會意識に目醒めて、更生の世界に憧憬する畵家達によつて二三創らる丶筈なのである。勿論社會的に同じ無反省でい丶のならこけ威しの所謂新興派即ち毎年上野に並ぶ瘋狂院の畵家にまたなくとも、純眞さの優先に於てだけなりと純眞な子供の作品の方を肯定する譯なのであるが、而しそれなら現代の底が求めしその社會的自覺級の畵家等の作品にそれは事實充され得てゐるのであらうか。

彼等は暗つぽい油切つた勞働者に惡魔のむせかへつたような工場を描いて個人的享樂した。それは古くよりして來たアカデミーシャンに於ける還境生活の表現心理と何等撰ぶ所がないではないか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勿論是が主義の宣傳目的だけなら知らない、而し範圍にして美術の深する宣傳的手段の世界は盡されて遠いことである。まして之れが飢えたる露西亞の饑民救濟に於て而も少く共寄金を目的とする展覽會に於てをやである。

現在は嚴密に二分された敵と味方だけの對障營である、對障間は盡され切つた溝である。所で疲れ切つた第四階級が□□を握る以外に、立つ力も失せた第四階級が、已の陰鬱な油臭い姿を再び工場の外で眼前に享樂することが出來たことであらうか。

彼等兄弟の求める世界は□□以外には、現存して享樂出來得ぬ想像的美術世界の方である。この純眞な還元される想像的美術にして始めて彼等は安住し得る。實に是は純一の永遠なる底の子供なのであるからだ。

僕はこんども同じ大きな目的ひ遂行に向つて遲々たる短所を今の場合兎や角言ひたくはない。まして今度の民衆美術展はほんの一部の瞥見に過ぎないし、言ふ不眞面目の畵も僅少なようであつたが、而し思ひつめた第四階級と、行動以外に考もたない上層隙級を深くも認識し得ない人々の、同じ運動者中に遊びしてゐるを是に含めてのでき觀な、

呪はれたる子供の純眞に於けるが如く、世界大衆の大部分か概念の支配化となつてゐる。主義者が書いたから革命美術と名命するなどの遊戯事は遠い過去にして、□□ならば實際的手段に眼前必迫した門扉の□□に目指すべきである。一歩を進めれば進める程に、彼等大衆は譯もなく近よつた人々ではないか。

僕は此の生れながらにして呪はれてゐる純眞な子供の作品に於ける還境反映の痛々しさと、求める社會意識の目醒人の餘祐尺々と裏書した不眞面目な繪に於ける失望とを味つて又様々な矛盾を感がへた。

共に年末のことである。『子供作品展覽會』は堂々銀座で資生堂が。飢えたる露西亞救濟の爲に、同志の群か追びつめられた、貧しい駿臺俱樂部の一隅で「民衆美術展覽會』を。（正夢）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世界欄

ロシアの饑饉と列國の干渉

他人の苦しむのを常に平氣で見て居られるのは資本家の根性である。資本主義の列强が飢ゑたるロシアを見殺しにすることはまだいいが、—この際そういふより仕方がない—こん度はその弱點をねらつて一思ひにやつつけやうとしてゐる。これらの國々は最初如何にも神妙らしく不幸なロシアを救つてやると言ひ出し、如何にも親切げに見せかけた。最も、東の仁義の國では民衆の展覽會をすらもみつぶしてゐるが……ところが、飢ゑたるロシアはロシアの窮狀を喰ひものにしやうとするようなそんな列國の奸手段には乘らぬ態度を示した。そこで、ロシアよりもつと飢ゑたる列國は、だんだん弱つて行くロシアにこの際荒療治を施そうと目論むような本音を吐いた。そこで、第三インターナショナルの執行委員會は萬國の勞働者に向つて言つてゐる。「資本家の團體は分捕品の分け前には一致してゐないが、革命ロシアに隙があつたら徹底的に赤色ロシアと世界のプロレタリア革命を一擧にやつつけようとすることには一致してゐる。世界の勞働者の義務はロシアの饑饉に同情すると同時に、各國の干渉に對し□□□□□□ればならぬ。勞働者よ、共産主義を相絶するために輸送□□□□□」と。惡い國は世界の列強とルーマニア、ユゴ・スラヴィア、ポーランド、それから……

……………

勞農ロシアに於ける イザドラ・ダンカン

イザドラ・ダンカンは、何故にロシアに行つたのであらうか。それは彼女が眞の藝術家だつたからである。彼女がもうブルジョワ臭氣の充ち滿ちたあの歐羅巴の藝術家の氣風に堪へきれなくなつたからである。

彼女がロシアに行かうと決心したとき、先づあらゆる新聞雜誌がそれを否定した。それからいよいよさうだと分ると、それを藝術家の氣まぐれからだといひ出した。さうしてとうとう歐羅巴も米國も彼女をかまひつけないので、彼女はやむを得ずロシアに逃げたのだといひふらした。

しかしさういふことはみんなうそだ。彼女がロシアに出發する前、彼女はアメリカとオランダから來てくれといふ有利な申し出をうけてゐた。彼女はそれを拒絶したのだ。クラシンがルナチャルスキーに談つたところによると、彼女ははじめロンドンにわかれをつげるのを怖れてゐたやうだといふことである。新聞は彼女が「ボルシェヴキ」だからといふので惡口をいつてゐたが

彼女のわかれの出演は連日滿員であつた。たしかに彼女がロシアに行くことは大膽なことだつた。彼女の友だちはみんなモスクワを以つてまだ砲烟や死骸で一杯の都だと知つてゐた。ダンカン自身も全くそれを否定しきれなかつたかもしれない。とに角彼女の弟子は一人しか彼女について來なかつた。

彼女がロシアでした仕事は、第一に敎育であつた。彼女はもとから體育及美的敎育に於ける革命家であつた。彼女の學校はみんな成功してゐた。しかもそれらの學校は結局ブルジョワ治下では閉鎖されなければならなかつたのだ。

彼女はかつてギリシアのヴェニゼロスと一所に古代ギリシアの光榮を今にかへさうとした。ヴェニゼロスは疑ひもなくその國民主義から古代ギリシアを恢復しようとしたのであるし、ダンカンはこの古代ギリシアに對する崇敬の念から發したにちがひなかつた。彼女は今でもヴェニゼロスの次の言葉をくりかへしてゐる。「社會革命と手をたづさへる政治は生活のうちに美を容れることが出來るだらう。それは現在の戰に於て勝利者たるばかりでなく、歷史に永久に光榮となるだらう」しかしこの事業はヴェニゼロスのことでない。

ロシア革命が起ると、ダンカンはすぐにその自分の考であるところの小供の解放とその敎育がその國に實現されるだらうと考へた。

しかし彼女がモスクワに來ると、舊ブルジョワの殘りが彼女のまはりに押しよせたしかも彼等は彼女がもう踊らうとしないので失望した。さうだ。彼女は彼等のために舞踊しようとはしなかつたが、勞働者のためには踊らうとしたのだ。それで出來るだけ早く勞働者のためにただの劇場を建てようとしてゐる。この事業はどうなされるだらう。例のブルジョワジは依然として彼女に惡口を放つてゐるが、彼女はそれにもかかはらず、ロシア勞働者のためにつくさうとしてゐる。彼女は「身振りの女王」であつた。しかし彼女の最大の功積はロシアに來たことであつた。

イーザドラ・ダンカンの手紙

次の手紙はイザドラ・ダンカンが、モスクワから「ルヴュ・コムユニスト」に宛てた手紙である。

『余は自己よりもより高きものを創造せんと欲し、又かくの如く死するものを愛す』。

「ツアラトストラはかくいへり」　ヒ・ニイチェ

「あなた方は私のモスクワに對する印象を待つてゐるでせう。私はウエルズやその他ここに來た文士連のやうにあなた方に政治上の印象を談ることは出來ません。私はさういふ問題については全く知りませんから。私はただ藝術家の印象についてあなた方に談ることが出來るだけです。さうしてそれは理窟で考へられるよりも、むしろ感ぜられたものです。自然のものにはどんなものにも第六感といふものがあります。さうして特に小供と藝術家にあります。それは私達に魂の心理や人間や町の一群の心理を推察させることが出來ます。この第六感といふものが私の藝術家としての經歷をつくり上げたのです。私はその聲を聞いたの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、商業主義が「藝術」を破壞した歐羅巴を見捨てたのです。この第六感によつて私はモスクワをさがしあてたのです。何故ならば物質的事實を自分のまはりに見もてここで行はれてゐることを判斷することは出來ませんから、透見する眼で見なければならないのです。何故ならば、ここで表面的なものはみんな一瞬間の類似に過ぎませんし、それに眞理はこの國の魂の奥ふかくかくされてゐますから。奇蹟はこの集團の大きな靈魂にささげられるでせう。

私は[redacted]進歩[redacted]了解するでせう。

モスクワは奇蹟の都です。さうしてロシアが受けてゐた殉教は未來には苦業の死であつたものになるでせう。人間の靈魂は基督が考へてゐたよりはもつと美しく、もつと寛恕に、もつと大きくなるでせう。

私はまたくりかへして、私たちがそれを了解するためには、あんまりそれに近すぎるのだといひませう。

もしも私たちが基督と同時代に生きてゐたならば、私たちは同じやうに何も了解しなかつたでせう。私たちはただあはれな弟子共をつれたつまらない人間を見たのみでせう。さうして彼の苦業の死は私たちには下らない最後と思はれたでせう。

けれども精神の眞理は全く別のものでした。

ここで行はれてゐる精神の眞理を私は未來に對するきらめく幻像のうちに見てゐます。ベートーヴェン、ニイチエ、ワルト・ホヰットマンの豫言は實現されるでせう。すべての人はこのロシアに生れた解放の大波につつまれて同胞となるでせう。

私の魂が感じ、さうして共産ロシアから起つた豫言の聲によつて私に來た使命はこれです。

[redacted]

イザドラ・ダンカン

サツコ・ヴアンツエツチ事件

サツコ・ヴアンツエツチ事件に就いては、已に外國電報に出たこともあるが、僕たちはこの事件が世界のプロレタリアにどれだけの反響を與へたかを見るとき、今から十[redacted]日本[redacted]の[redacted]され[redacted]使[redacted]樣[redacted]こん度もイタリアの無政府共産主義者がアメリカで死刑の宣告を言渡さると同時に、世界のプロレタリアは一齊に起つた。そして到る[redacted]でも地方に於てもつづけ樣の[redacted]猛烈に開始してゐる。現にパリでも[redacted]知らぬがアメリカの大使宛に書留で香水箱を送つた者があつたが、その中に潜められてあつた爆彈が幸か不幸かわづかのはづみで大使の一命を助けてやつた。大使と令孃が外出の歸り階段を昇つてゐると、大使の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

部屋にあつた包みが自然と爆發してそこらのガラスを目茶苦茶にした。そして、危い所で一命をとりとめた。だから言はぬことではない。他人がパンや藥がなくて困つてゐるのに、香水などをつけてゐる貴婦人令孃たちはよくこんなことに遭ひ兼ねぬものでもない。何故世界のプロレタリアはこんなに執拗に憤怒してゐるが。それはかうだ　全く無實のサツコ、ヴアンツエツチ兩名のイタリア人を共產無政府主義者なる故に普通の殺人犯として死刑の宣告を下したのだ。（事件の眞相及び兩人物の經歷に關しては、何日か言はうと思ふ）。かうなつて來ると、世界の藝術家たちも默つて居れなくフランスではセヴリヌ、ロマン・ロラン、アナトル・フランス、アンリ・バルビユスはこの不祥事件に對し、アメリカ政府は速かに特赦を與へよと大統領ハーディングに打電してゐる。

マキシム・ゴーリキとエスペラント

昨年の正月モスコウに行つて來た或る外「新聞記者の話だ。彼れはゴーリキの宅に二日も宿つて來た人でエスペラントにはあまり興味を持たぬ男だが、そのことに就いてゴーリキは彼にこんな話をしたと言ふ。

「君はそういふが、早い話、飛行機だつて潜航艇だつて、遂ひ昨日まで空想の空想だと言つて問題にされなかつたぢやないか。エスペラントは飛行機と同樣に、潜航艇と同樣に、決して空想でないことを完全に證明してゐるよ。僕の知つてゐる男が、歐洲の各國をエスペラン國で渡り步いたが、結構それで通つたと言つてゐた。こんど出來る宣傳者養成學校でエスペラント語を採用することになつてゐる……」

寄贈圖書雜誌

壞人。現代文學。ロシア文學。表現（創刊號）十萬部賣れぬとか云ふ方に非ず）。宗教と藝術。社會主義研究社會政策時報。我等。ナロオド。文藝句報。藥。曲水。俳諧文學。勞働者。演藝。近代生活。新組織。詩聖日本詩人。炬火。新詩人。無名。新樹。狼烟（鬼權の門前十一頁削除されあり）尺土。解放。野依雜誌。太陽。痛快。枯野（新年號）國有鐵道ビラ（物騷な繪だ）。ふらんす。セキハイ

愛の雲（井上康文著）　詩人會

開かれぬ扉（坂本石創著）　恒星會

大浦兼武傳（記念事業會編纂）博文館

絶對の慈悲に浴して（野依秀一著）　實業之日本社

世界の魂（福田正夫著）　一歩堂

空に指して語る（内藤辰雄著）　天祐社

山澤榮子畫集　太阪新世界ヴイ文具店

地方欄

第八師團の出動に就いて船川港のH君に答ふ

貴兄の書面たしかに落手しました。あのことについて徹底的に僕たちの態度を明かにすることの出來なかつたことは確かに殘念でした。しかし、僕たちの態度は初めからはつきりしてゐたのです。貴兄の言はれた通り僕たちに取つて同樣には「滑稽」にしか價しないのです。それと同時に、「おめおめあの港からロシアに向つて兵隊を出動さした」ことを堪へ難い汚辱に感じたのです。僕はあの時——それは十二月の末頃です——飢ゑて死ぬロシアの民新聞に送り、ついで僕たちの第十七聯隊の出動に對する態度を明瞭にして置きました。しかし、さう言つた記事は今のブルジョア新聞にはとても發表し切れぬものと見えます。さう言はゞ酒が強すぎるのでせう。さう言つた理由でもつと僕たちの態度を具體的にその頃已に發表することの出來なかつたことはたしかに「恐る可き」手落ちでした。しかし、もし新年號が手に入つたら解いてくれたことでせう。世界欄の「ロシアの飢饉と列國の干涉」といふ記事を御覽になれば多少僕たちの意志が解られたことと存じます。さうです。僕たちの眼の前には解決を要す可き重大な事柄があります。が、しかし「ささいな事」のやうに見えることが必ずしもささいなことではないのです。當面の問題それが、かなり重大な意味をもつて、常にその解決を僕たちに迫つてゐる。僕たちが怠つて居ると見逃して仕舞ふ程これらの問題が僕たちの眼の前にころがつて來ます。僕たちはもつと眼を開いて今の世の中の事變を見極めやう。第八師團のシベリヤ出動などはたしかに一般の仲間から等閑に附せられてゐます。ロシアの飢饉のために叫ぶ僕たちはもつと、どうかしなければならなかつたのですが、多くはその存在の事實すらも覺えてゐません。貴兄たち、船川港の同志諸兄の足もとからそのやうに見せつけられた心概お察しいたします僕たちはお互に「勞働問題や農民問題以外にも」僕たちの默つて居れぬ、また居つてはならぬ事件が數々あることを記憶しやう。それにつけても、將來とも、大局の事件と地方的事件が常にあることでせう。地方的事件を解決するためには地方にしつかりした結果がなければなら

ぬことは無論です。そして、それをもつとも流動的にするためには地方の言論の機關が增々必要な次第です。地方のブルジョア輿論の傳播であるところの地方新聞をやつつけるための ほんとうの僕たちの機關を一日も早く出現せしむるよう努力しませう。それによつて僕たちは初めて完全に種が蒔けるでせう。さらば。（小牧生一月七日）二伸、榮城君の從弟が浦鹽に行かれたさうです。それを歌つたのか榮城君の詩です。

農村文化建設の提唱

私は大正十一年の元旦を故郷に向へた山國で有名な上州の東北隅大利根川の上流を爲す神流川の水源地、四面屛風の樣に山又山に包まれた一寒村其處が私が二十數年前生れ、育てられた古里である。私は忘れもしない大正三年の三月三日の雪降る日母に送られ村を出たまゝ村の事に就いては何も知る事が出來なかつた。私は久しぶりで懐しい故郷の新年を迎へ老い行く父母等のすこやかなる顏を眺め作ら過去數年間に於ける村の出來事を聞くことが出來た。私の家は村を圍む山の中腹にあるので窓から見下すと山と山との谷間を曲流する神流川に添ふて點々と軒を並べて建てられた農家や社や寺や森や畑が畵の樣に展開される。水の流る音木の葉に戰ぐ風の音の外何ものゝ騷しい雜音もなく實に平穩であり長閑な氣分が溢つて居る平和な村は都會から逃れて來た私にとつては全く別世界の人となつたかの樣に心體共にのんびりとして故鄕の昔ながらの美しい山や川や森や總てのものに懐しさと嬉しさとの心を惹かれずには居られない。

この詩の樣に麗しいそして靜な村の中にも過去僅か數年間に實に驚ろくべき悲慘事や大變動が起つて居たとは信じられない。けれども父は「私が不在中隣りのA家では地所を全部賣拂つてしまひB家では一人殘らず村を去つてしまひC家では子供は一人殘らず工場へ賣つてしまつたと次から次へと變り果てた村の話しをして聞かせました」母は又「おまへの小學校友達のDさんも敎員になり、Fさんは役場の書記になりEさんは銀行へ、Gさんは○○會社へ勤めることになつて殆ど村の若い者は村で百姓をやつて居る者はない樣になつてしまつたと語つた。これ等の斷片的な話題を總合して私は今更ながら村人の思想上の變化に驚かざるを得ない。

私が村を出る頃村人等の心は村から一歩外に出ること非常に嫌つて居た。朝から晩まで馬の背の樣な小さい村の中を天地として自から耕して自から食ひ只々自給自足の生活に滿足して居たのである。處が過去數年間に於てこの平靜なる村も根本から覆がへされてしまつた。文明の力は偉大なるものである。

村の附近まで汽車が開通され、村の中に水力發電所が建設され新しい工場が建てられる樣になつて來ると村の人々等もじつとして居られなくなつて來た。加之經濟上の壓迫と新思想の傳波とが襲つて來た。村人等は遂に目覺めなければならなくなつて來た。先祖代々から遺された土地にかぢり付いて居たのでは到底人口の增加せる一家を支持する事が出來なくなつて來た事を知るに至つて副業として

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

濃業を始むる者もあれば果樹の栽培を始める者もあり新聞廣告に誘はれて相場に手を出す者もあり銀行會社員となり官吏となり一人去り二人去り續々として都へ都へと流れ出る者が多くなり村の殆ど青年の全部が農を離れ畑に出て香氣に土に親んで居る者は中年以上の老人にあらずんば無知無能の徒のみと云ふ狀態になつてしまつた。これ等を見ても如何に質朴なる村の青年等の氣風が强度の都會病と拜金熱に浮され居るかを知ることが出來る。從つて今や村は衰微し各農家は將に破産狀態に陷らんとして居る事を目擊するに至つて轉た今昔の感に堪へない。殊に私の村人等は總ての階級を通じて非常に利己的觀念と拜金思想のみ强く自分さへ金が多くなれば其れで事足れりとし富める者は自己の財産を維持することにのみ汲々として村の爲め他人の利便等全く省みず貧しき者は其の日〱の食を得るのに汲々たる有樣なれば村の改良發達等は一歩も進步せず凸凹せる道路、狹少なる學校其他總ての村の施設は依然として昔の儘に存じて居ると云ふ有樣である

斯る現象は單に山間僻地の私の故郷のみならず、全國到る處の農村に於て觀らるゝ現象であらうと思ふ。農村の危機農村破産の聲は多數の識者間に叫ばれる樣になつて來た。微と思ふ今や農村は到る處破壞の極に達して居る、然れども破壞は建設の基礎である。私はこの破壞された農村が近き將來に於て再び建設され眞の農村文化建設の日が來るべき事を信じて疑はない各農村に於ける有爲の青年諸君が徒らに不完全極まる都會文化と拜金思想にのみ憧憬することなくて人生の理想郷たり得べき能力に富める、農村に於て意義ある人生生活を發見し自我を捨て完全なる農村文化生活の享樂の第一步に向つて猛進するに至つて始めて一國文明の完全なる進步發達を見ることが出來るのである燒くべきものを燒き盡さずばやまない猛火は世界の果てまで擴がつて行く都市に於ける社會問題の火の手は更に農村社會問題に向つて新しき火の手を揚げんとして居る時に當つて、切に農村文化生活の建設を提唱するものである。(一月元旦九三生)

放浪の旅から

わしは放浪してここまで來た。こゝとても永くは落つけまい。これは東北のある町の話だ。こゝの町長は暴王だ。あの人間はきつと滿足な死に方をしないだらうとは町民の皆が言つてゐることだ。が、しかし意氣地ない町民には誰ひとり表面からさう廣言の出來る奴はゐない。さしあたりわしだつてさう云ふとひどい目にあはされるだらうから當分引込んでゐるわけだ。それならどんな奴かと云ふと、何さ、そんな奴に限つてつまらぬ人間だ。政友會とか憲政會とかの陣笠だ。それでゐて、大きな顏をして居られるから田舍は不思議なものだ。わしが支那で放浪した頃ふふんとよく嗤つたことがある。支那の大人が葉卷かなにかくはいて見すぼらしい車力に乘つてうそぶいてゐるのが名譽あるこの町の暴王、即ち彼だ車力と云ふと、近頃めつきりよぼよぼの車力連がふんがいしてゐる。ふんがいなら未だ良いが、めしが食へるとか食へぬとか云つてこぼしてゐる。どうせあんな奴はみ

んなくたばつて仕舞へと暴王は心の底でさう思つてゐるだらう。そして、こん度出來る自働車會社の配當の胸算をしてゐることだらう。ふゝんと云ふ支那人の顔が思ひやられる。そうすると、こゝの町を取圍んでゐる山々も一齊にふゝんと嗤つてゐるやうに見える。文明の利器なんて、どいつの寢言だ。貧乏暇なしの車夫共の失業者四十名を一體どうしてくれるわしは自働車の恩澤を百も聞いたがさて生きてゐる人間をどうしてくれるのだらう

わしはまたこんなことを聞いた。町長はこの稅役場の木葉役人の首をちよん切つたさうだ。切つたと云へばそれ切りだが、それにはあることか無いことか、謂はくがあるらしい。先刻一寸話して置いたがこの旦那町の有志のブル十名許りと計つて一里餘ある停車場と連絡の自働車會社を創立したそれで車夫共がぶつぶつ言ひ出したのさ。そして、その起點として選定されたのが偶々木葉役人の家であつた。處が木葉役人でも先祖傳來のリン木畑（りんご畑のこと）が家に附屬してゐて、それが一家唯一の糊口となつてゐたのだ。すると、暴王は町長の威嚴で先づ町の公德心に訴へ涙金でそこを立退かせやうとした。玆に言つて置くが、自働車の利益は全部會社の利益であるからやれ切れない。そこで、ごた〳〵が起きる木葉役人はほんとに町のためなら犧牲になつても良いと言ひ、町長は町のためなぞどうでもいゝ、資本家のためになれと言つたにきまつてゐる。事實結果に於てさうではないか。その證據に、木葉役人は首になり、僅の涙金で家は追はれ、りん木畑はめちや〳〵にされ、揚句の果ておら知らん、だから貧乏人になつて生れぬなと毒づかれたにきまつてゐる。

ところで、もつと氣の毒なことがある。それは幸か不幸か木葉役人の細君は恰度町の小學校に奉職してゐるのであるが、これとてながくはあるまいとの町民の豫測。

だから、おれんとこの町の連中は車力はじめ云はぬことではない、町長の旦那は滿足な死にかたをしまいて。（東北の放浪者）

婦人欄

女性の歌

磯川潤子

おしろいのかほりもかなしぬばたまの
暗にひそみて君を待つ夜は。

娼婦は自らを求むるもの丶ために飾るといふ。君なる一人の男性の心を惹き喜ばせんためにのみ彼女は装ふ。何故に彼女は彼女自身のためにも、彼女自らの滿足と喜びのためにも、彼女自身を装つてはならないのであらうか。彼女は彼女の美しい着物や格好のよい髪容で君なるもの丶歡心を買はんとすることのみがその課せられた運命であらうか。

君なるもの丶歡心を得君なるもの丶心を滿さんために彼のみの好む髪を結び、君なるものを喜ばせんためにのみ白粉の下に媚笑をなし、彼女はその代償として君なるものより美しい緋房の付いた籠と快き青草と味よき餌とを與へられる。若し彼女にして君なるもの丶ために装はず君なるもの丶好まぬ髪容を成したならばどうであらうか。忽にして彼女の生活は斷たれ生命は斷たれるであらう。三從の美德に育てられ、生殺與奪の權を惜げもなく他に任せて、媚を賣りながら生きて來た女性なるものには當然のこと丶言はればならぬ。

女性よ、假令生殺與奪の權を他の手に任せやうとも、君なるもの丶ためにのみ髪を結び衣服を選み君なるものを喜ばせるためにのみ其の緋房の付いた籠で聲を限りに歌ふがよい。艶なる媚笑を傾けるがよい。

野は嵐が烈しい。そこでは籠の中で自ら勞せず與へられた味好き餌も新鮮な草の葉も額に汗し翼を傷めずしては求め得られない。日が暮れて寒さが身に迫る頃も、其日の糧を得られずに荒野を彷徨することもあらう。或は恐しい鷹の爪に襲はれやうとすることもあらう。よく飼ひ馴らされた手馴の鳥よ、お前の翼はあまりに從順で野の嵐の烈しさには堪へがたい。何も思はず何の不平も言はず、何時までも從順な籠の鳥で自らを賣つてその餌を與へられ、お前の飼主を喜ばせるために聲を限りに歌ふがよい。

×

婦人が自由に胸を廣げ太陽の光をまともに受けて直立し得る世界は、淺薄なセンチメンタリズムや僞善的なロマンチシズムの涙に溺れる歌の世界、詩の世界ではない。眞に自由な婦人の世界は亦總てが自由平等なる〇〇〇の實現された世界のみ。

婦人の歌と言はれるもの、如何にその髪を誇り彼女に服從を强ひるもの丶ために白粉を塗り如何にその依賴主義の心情を、臆面もなく暴露して得意げになつて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

居ることであらう。それは商人が客を呼ぶために商品の包裝や體裁を飾るのと一般である。彼女等は一個の性的商品として顧客の前に提供される。それが彼女等の生活を支へる唯一の道である。そして病的なロマンチシズムや僞善的なセンチメンタリズムで自分自身の放逸な情緒に溺れては、明けても暮れても涙を武器とする卑怯な戰術を弄して居る。婦人の誇は太陽を仰いで暢々と自己の生活に生くる力强さではなくして、薄暗い鐵の格子の窓から、臆病らしくおづ／＼と外を眺めて暴君の鼻息をうかゞふことである。虐げられては縮り石塊のやうに辱められては縮り足蹴にされては縮る。精も根も枯れ盡し屈辱も怒りも感じ得ないまで、底無し沼に墮落して居ながら、たまに救つてやらうとするものがあると直ちに不道徳の第三性化のと言ひ出す。

されど私達をして眞に强き熱き希望を求めしめよ。私達の求むるのは涙を嚙みしめて心の底よりの悲しみを知る女である。强い勇敢な戰を戰ひ得る女であつて優柔な甘い涙に溺れるロマンチストではない。

臆病な姑息の手段では病根を斷つ得ない。思い切つて切開しなければ病は百年の禍を殘す。本當に性を超えた立場に人間として直立し得る時が至らなければ、多くの婦人問題も畢竟部分の遊戯に終る本當に第一に總ての婦人が個人としての獨立を得られる自由の社會が實現されて欲しい。

二つの道がある。盲從者か――反逆者か――。

婦人の解放

八木秋子

さま／＼の人が立つて、女性のために自覺を叫んで居る。女性はたしかに自覺しつゝある、けれどもそれは、極めて概念的な何とはなしの自覺ではないだらうか。今日の殆んどすべての女流が、所謂熱烈火の如き戀の歌を謳えば、譯なくそれに共鳴して安價な涙を注ぎ、ブルヂヨア階級の婦人の、戀愛沙汰や家出事件等が、一度傳へられると、恰も芝居の觀客が次の幕を想像するやうな氣分で毎日の新聞を待つといふ現狀である。比較的目醒めた女性と雖も、尙ほ感傷的な域から一歩も出て居ないやうに思はれる。彼女等はたしかに同性の位置の向上を期して一齊に立たればならない事を知つて居るそして又虐げられて居る無産者の爲めに立たなければならぬ事をも知つて居る。がそれもまだ極めて概念的、若くは抽象的に考へて居るだけで、それ等の要求の因つて來る根本をたづねやうとする、眞劍さも眞面目さもないではないだらうか。

第一女性の多くは、あらゆる思想の根本である自我の追求に對して極めて冷膽である、臆病である。

實際自己を容赦なく掘り下げて、確實なる自我の姿を發見せんとする努力ほど眞劍な苦しみはないであらう。女性の多くはその恐ろしさに堪へないで、つとめて避けやうとする、そして大抵はよい加減な所で妥協してしまうのである。深刻さが足りないのだ。

誰しも自我を確實に認識すれば、今まで安住して來た自己の全部に、あらゆる周圍に對して、奇異の眼をみは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

同時に、火のごとき憤りは猛然と自己の内部に爆發せざるを得ぬ。

今日我國の女性に、この域にまで進んだ人々は多いであらう、然もこの時、周圍のすべてより反逆者と罵られつゝも尚ほ且人類としての正しき意志に生きんがために、赤裸々なる一人の自己を地上に立たしめて、大聲に戰を宣し得る勇氣ある婦人が幾人あるであらうか。

婦人にとつて絶えがたき恩愛の絆がある經濟的庇護がある。盲目的戀愛がある私は我國の婦人ほど、異性の前に弱くもろいものはないと思ふ。これ等は、皆感情的な婦人の心を、その試練の恐ろしさに戰慄させて、自己僞瞞の座に引き据えるのだ。

そして盲目的な戀愛から成立した結婚は、忽にして期待は裏切られ、經濟的壓迫と、狹い家庭内に於ける異性或は同性間、又新舊思想の相違等に、反目嫉妬猜疑羨望などの情焔に身を燒いて、伸ぶべき生命を惜しくも枯らしてしまうのである。

私たちは、小さくとも自己の内に萠え出でんとする生命の芽を、雨風に堪へ大切に守り育てゝ生長させねばならぬ、それには、大なる理想に輝く、堪へざる感激の沃土こそ必要であらう。（一九二一、一二）

「婦人欄」に遠慮ない寄稿を祈る。僕たちの主張する運動には男も女もない筈だ。「婦人欄」は行動の婦人の聲でありたい。

種蒔き社講演會

種蒔き社は今月中に文藝講演會を開き同事にロマン・ロオランの「ダントン」第三幕を上演する事に決した。はじめ「狼」にしやうかとの説もあつたけれども、一幕を切りはなして上演することは困難であるので「ダントン」に決した。全權は孝丸に委任してある。登壇俳優は新舊編輯人總出で活躍する。稽古は餘程進んでゐる。役割は暫く預つて置く。正俊、小牧、孝丸、逸平、弘二、洋文、正夢、初之輔、光造、賢三諸氏の名優振は刮目に値する。講演は執筆家の中からも應援がある筈だ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生活

監獄生活から見た諸名士

山羊髯の高橋義信、
役人を呑んで居る野依秀一
勢のよい平渡信、
僞電の山中蜂太郎、
大法螺吹き西塚豊三郎

一四人SM生

徴兵檢査の次の歳で、春深く、花に狂ひ、酒に醉ふ人もなく、飛鳥山にも醉客滿歩する者とてなく葉櫻は青嵐の蹂躪に委すのみで誰れが是れをとがめむともせず、山の北方から荒川方面を望めば市街は煙突の町かと思ふばかり大小の煙突は雲間に林立して白日に猶ほ暗きあるは王子の町である。

一日六十五錢貰つて石炭擔ぎをしたり職工の手傳をして其時の私は、田舍から飛び出して來たもの別に目當もなく東京へさい出て行けば自分一人位困る樣な事はないだらうと思つて來たのであつたが花に誘はれて些少ばかりの小遣錢を持つて來て金のある中は春氣に遊び廻つたが今夜宿錢はあるが明日から此儘だと飯が食えないと云ふ事を氣付いた時は實に悲しいやらで胸が一杯になつた。

板橋の木賃宿へ宿泊つたのは明日からどう仕樣と云ふ時であつた。處で一々會ふ人毎に困つた困つたと訴へる譯にはいかず實に困つたのは此の時であつた。それでも世間は廣い樣で狹いとか云ふがそうかも知れない。

捨てる神があれば救けろ神もあるの理諺にもある通り合宿の客が話の次手から君はどんな仕事でもよいと云ふんだら明日俺と一緒に行かれえか、と親切の言葉に學天の雨の樣に喜んで六に聞もしないでそれでは御願ひ致しますと云ふと『仕事はそんなに骨は折れねえんだ』

たんとはとれねえが毎日行きさへすれば六十五錢にはなる上、先方へ行けば宿はあるが當分此處から通つたらどうだ。

「ハア有難うございます何分御願ひ申ます」と心から頭を下げて頼むだのも此の時であつた。田舍を飛び出した時は東京へさい行けば必と何處でも好な處へ奉公が出來五年と八年の後には立派になつて歸つて來ると意氣込むで出て來たものの來て見ると中々そんな棚からボタ餅的の口は一軒のあり合せもなく遂に木賃宿生活から一日六十五錢の常傭人夫でも有難いと涙を流す程喜ばねばならぬ境遇であ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つたが木賃宿から一週間程通ふて仕事先で心安い者が出來て俺の處へ來て居たらどうだと云はれ其の氣になつて其の宿へ引移つた。引移つたと云ふと何だが大形相だが身體一つ持つて行くだけだから何んでもないのだ之れでも御附きはちやんと附いて居るから豪氣な者だ御附きと云つた處で牛や馬が附いてる譯ではない、と云つて人間は猶附いて居ない虱身體半に附いて居るのだこんな御附なら附いて貰はない方がよ程よいのだが、と云つて自分で頼むで附いて居て貰ふ譯では無論ない。――然し考へて見ると虱だからとて餘り粗末には出來ない自分が食ふや食はずの時でも寢る時には自分が寢る處ならば野宿でも一緒にして來た御友達ではなくて眞の血を分けた兄弟同様の眷屬だもの附いて來るのは當然だ。木賃宿から眷屬を引伴れて此度は私達仕事の親分の處へ引移つた、此の親分と云ふのは王子附近の工場の人夫請負兼木賃の親父なんだ自分の手で各工場へ人夫を入れては一人頭十五錢か何程か撥ねて毎晩上り酒を呑むで居るのだ、それだから一人の人夫でも大切なんだ景氣のよい時には人夫の奪合せで中々骨が折れる甲の親父は同じ工場で働いて居て乙の親父より三錢餘計に仕拂ふとか丙は乙より五錢多いとか云ふのでそれが知れると人夫は少しでも多い方へ行くから少しでも割のよい仕事を見付て仕事を見付て仕事をさせないと逃げられて仕舞ふさうすると頭が撥ねられないから甘い酒は呑めない譯になる。

隨つて若衆〳〵と口では可愛がつて居る殊に仕事についてばかりでなく宿賃も取れば、飯も自分の家で成丈食はせる樣にして居るので其の方からも少しは利益があるから十人も置けば自分ではそんなに仕事などをやらなくてもよい。

中には三十人位まで仕て居る者もあるそんな親方になると大したもんだ。私の居た家は十五人程居たので中々にぎやかであつた、折々喧嘩もした、其の喧嘩は大體人夫爭奪から起るのが多かつた。此處の人夫宿へ來てから一ケ月餘り經てからの事他の親父の處へ行かないかと誘ふ者があつたので行てもいゝと話して居るのを一緒に居る人夫が聞きつけて家の親父に話した處が其の晩親父の前へ呼びつけられて貴樣は板橋の木賃で困りぬいて居る處を家の九藏が拾つてやつたんではないか其の恩も忘れやがつて他へ行くなんてとてつもれい事をぬかしやがると酒呑みながら酒と一緒になつて私に云つたのだお互に一口云ひ二口云ひ終には二人で頭の撲り合ひを始めた。

醉つて居るので撲り合は遂に組打ちとなつたが親父の方が下になつて落ちた。あまり高くない座敷から落ちたのだけど下になつた親父は落ちながら上り框の角へ頭を打付つたから頭から腦味噌が飛び出た程大負傷をした。御蔭樣で親父はそれが元で死んで終つたのだ。

因果應報とかで有難い事には傷害致死と云ふ口い罪で六年間は死んで居ろと仰せられた。

つて居たけど三十分程經つた時自働車が止つた時網の目から外を見たら煉瓦で出

來た大きな鐵門だけは知つたが何處だか知れなかつたが附添の看守に聽いた處が豊多摩監獄だと解つた門を潜入つて自働車から下された一行八人程の囚人は赤い着物を着た者もあり、縞のを着た者あり洋服を着た者もあると云つた樣な譯で一樣ではなかつた。然し一樣に手錠を嵌められて嚴めしい姿の看守に視護られながら小さな潜入戸を這入ると直ぐ片端から姓名を聽かれたり何んの爲めに此處へ來たかとか罪名は何だか刑名は何んだとか丸で被告學でも講義されて居る樣な氣持ちがする戯談じやあれえ實地試驗なんだ洋服の男なんど何を云つたのか看守に横額を撲られながら御免被下さいて言つて居た、それから素裸にされて丈を度たり量を衡たり、口の入齒が何本で蟲齒が幾本とか、頭にハゲがあるとか手の甲に燒跡が二本長くなつて居るなんと云ふ風に一々書取られ恰度徵兵檢査の樣な氣がした。けれども徵兵の時の樣な自由な氣分はなかつた、それも其の筈さお檢査を受けるのでなくて調べられるのだ調べられた全部が合格と決つて居るのだから調べられる時には身體丈やつと這入位の處へ押込められて調べられるのだもの當前の事さあ。此處で全部が合格と決つて今迄着て居た着物は縞着物でも洋服でも全部衣更へと洒落込んで今度はある社會から最も恐れをなして居る處の危險思想を表象した赫色の着物然かも只で着換させられるのだ、否無理にも着換させられる有難い特權階級となつたのだおまけに出來のよくない顏は斯樣な處で見せるべからずと云ふのかしら子供お化が被る樣な布製の帽子を頭から顏まですつぽりと被せられ、

に打込まれてピーンピーンと音を立てゝ鐵の扉を閉された時は、未決監で慣れたと云ふ者の新らしい感じが起きて今日から愈々六年と云ふ長い月日を此處で送るのかと思ふと氣も心も消え入る樣であつた。三四時間の後看守が來て、原籍地生年月日、親族關係等を聞かれ、此帳簿に記された外は決して面會する事は勿論手紙を出す事も出來ないのだが、と念を押された時何だか知れないが涙がぼろ〳〵止めどもなく出た看守はそれを見て貴樣は横着な奴だと横顏を嫌と云ふ程撲り付けられたが此の時は前の王子の時の樣な元氣にはなれなかつた。

再びピーン鐵の扉は元の樣に閉められた時の寂しさ一層强かつた。

疑ひ出した時思はず飛んだ事をしたと想つた、其の日は暮れた翌日昨日の看守とは別な看守が入監感想錄と書いた罫線のある紙を持つて來て此の紙に書いてある上の文句の下へに適當書き込むのぢやと云つて置いて行つた。斯んな事があるのかと見れば六行に仕切つてあつて其の概要は次の樣であつた。家郷の事を思はないか、どう云ふ動氣で惡事をしたか、何の爲めに金を費つたか、親兄弟の事を思

はないか、と云つた樣な事であつた。然し私には親兄弟の事や故郷の事は兎に角何の爲めに金を費つたかの行には何とも書樣がなかつた。それからどう云ふ動氣で惡事を仕たかと云ふ行も可成り不愉快な感じを強くした。

思へば夢心持ちだ南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

入監して三日の間は別に仕事をさせられないで唯だ薄床の上に單坐し居ればならぬのだから自然種々の事を考へる否考へさせられるのだ。過去から現在、現在から未來と云つた樣に或は考へ來り考へ去り後から後からと種々の形をした偶像や化物が頭の中へ映るので中々苦痛な者だ。時々妙な感じになるが又元に戻る何時でも現在を中心として考へる。起床後三十分間程息心調和法とか云ふ一種の復式呼吸を強制されて後自分の監房に歸つた時は又深い深い默想に落ちる、之れも其の筈見る處と云つても些少か疊三枚敷の廣さで然かも煉瓦の舍屋だかられ、窓と云つても三尺四面あるかなしで七分三七分に開いて居るのだ。

七三と云つても閉つて居る方が七分で開いてる方は三分（上部の方が）であるから外などは全く見えない。元見えない樣に造つてあるのだから見えないのが當然なのだ。五分毎か十分毎には上の方から（扉の上層にある網目）、チヨタチクヨ窺くのだ其の時キチンと單坐して居ないと直ぐに怒り付られるのであるから。たまらない。此の外看守部長が二時間置位に例の視察口から窺き込むし看守長が一日に一廻來たり二廻來たりする。斯樣なつては活動俳優の松之助でも千里眼だつてどうする事も出來まい、唯清い息を霓の樣に吐いて居るだけだ。然し人間なんて奴は實を云へば安外生氣地がないので自分ながら人間が嫌になるよ、少し辛いとか苦しいかとだと直ぐ屁古垂れて終ふのだ、それで居て萬物の靈長だと宇宙がどうの階級闘爭が何の可のと騒ぎ廻つてるのだ、自分はなぜこんな馬鹿馬鹿しい人間などに生れて來たかと今更苦情の持つて行き場もないから默まつて居るがれ、それに比べると鳥や獸は何んと愉快ではないか春が來れば獨りでに毛が短くなつて夏までにはチヤンと取換へられるではないか何處の山であらうと何處の國であらう好な處を飛び廻つて何んの差し觸りもないではないか、それを見ると羨しくなる造化の神樣もそこ迄御氣が付かなかつたと見える。オツト遊つた脫線だ人間にはもつと自由の天地があるのを忘れて居た、着物を着換へる事などは自由自在ではないか此の特權を忘れてはならぬ此の自由があればこそ

なんと有難い事ではないか、サラム勿れ、身體が急に輕くなつたこれから六年と云ふ者は今迄の樣に食えるとか食えないとか云はずに濟む、世間の騒擾しい事も聞かずに濟む、生活難なんて妙な化物に出會ずに濟む、斯う思ふと氣も心も伸々する言ひ換へれば三度〳〵の飯もチ

ヤンと運んで呉れるから、食ふ事だけは先づ是れで安心だ。

　そればかりではない家賃が滞納して店立を喰ふ心配もなければそんな心配をする必要もない。着物が汚れた頃には美麗に洗濯した着物と取換へて呉れるので全く閑日月が送れる。

　きたない話だが糞小便は毎日必ず方づけて呉れるから現在の東京市民の様に糞をする時まで頭を煩はす事は絶對にない一口によく糞小便の世話迄燒かせてと云ふ言葉を折々聞くが、糞小便の世話迄ちやんとして呉れるから私の様な不性者には眞實に持つてこいだ。あまり氣持ちのよくないのは鐵のドハのビンービーンと音が氣にかゝる、長い間だ氣がゝりであつたビーンビイツも、月日と共に漸く慣れて此頃ではそれが反つて愉快な感じになつて來た、雀の啼く聲に附近の看守の子供の泣き聲より他にあまり耳にしない此の處では自然ドハの音も音樂の樣に聞こゆるも偶然ではないかも知れない。斯ふなつて來ると鐵の柱に煉瓦の壁鐵のドハ鐵のドハ幾度繰り返しても不思議な事ない當然過ぎる程當然の事だ何を苦しんで今迄氣にして居たのか自分で自分の心を疑ひ出した。あまり呑氣だからこんな事を考へて暫くの間過したが、私も小供の時分から富豪の大きな家を見ると、俺だつて今に大きな邸宅を造つて煉瓦の家だつて石の家にだつて這入つて見らあ、と云ふ樣なよからぬ心を起した者だが、そんな不良性も持つた私も遂に自分で造らなくても　這り込んだので身體中の何處に居たのか癩の蟲もこれで漸く治つた譯だ、御陰樣で有難涙がほろりとこぼれた、時も時又々例の不良性を起して今此處で自分と同じ樣な幸福な生活をして居る者は一體どんな顔をして居るのか、どんな肩書きの者が居るのか急に知りたくなつた。さうこうする中に此の中に元東京市會議員で辯護士であつた高橋義信とか云ふ男が居る事が速ぐ知れた。なんでも此男は大きな聲の持主で三つ四つ離れて居た處に取る樣に聽く事が出來る。彼れは商賣が辯護士で政友會員で且つ又東京市會議員である上に東京に於いて政友會員として領首であると、彼れ自らが漸々口にする處である

　彼れは又大浦君が同志會へ入黨する事を進めた時には俺は嫌だと云つたのが元で監獄へ來たのだとさも得意らしく大聲で語るのが彼れの常であつた。そこで彼れは又俺は大浦は元來好かんからなあ。最後に何時でもハアハアハアは附きものであつた。彼れの囚人番號は八百六十六號であつた。然し彼れは殊更らしい笑聲で典獄始め其の他の末輩共を押へ付て居たのば爭はれなかつたと當時評判であつた兎角監獄と云ふ處では屁をひつても懲罰に附せられる所なのに彼れ丈は其の笑ひでも彼れの特別扱ひである事が解る。彼れの樣な不屈漢でも蚤に悩まされたと見えて晝間看守との押問答が又ふるつてる彼れの仕事は麻つなぎをして居たのだが話の調子を合せるので兩手で山羊鬚をしごきながら蚤が毎晩群をなして來るので流石の俺も少なからず閉口したよ。彼れは此の山羊鬚について少なからず語られねばならぬ經歷があるのだ。兎角監獄へ來れば何人も鬚などを剃られて了ふのだが彼れにはそれが及ばなかつたのは下の樣

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な理由があるのだ、彼れが入監して間もなく看守が剃刀を持つて彼れの髯を剃る爲めに他の囚人に命令して今や剃らうとした時彼れは泣き出し相な顔をして俺の髯は三十年の政治的生命を保つて來た此の髯を今切り落されては俺の命はないものも同じ事だと泣き聲と共に威嚇する樣な態度で云つたので看守は驚いて直ぐに受持看守長に上申した處が何處をどうしたのかそれで髯は殺されそこれた譯されだから中々此の髯は因々附の髭なんである。それから彼れは間もなく假出獄で出た。　假出獄して半になるかならぬ時下谷區から打つて出て東京市會議員となり、辯護士に大禁物の恐喝罪も彼れにはそれ程邪魔ではなかつた。果してそれが大政黨の御蔭であるか何かは知らないが兎に角小石川の藤田の所で一緒に開業したが間もなく第二の疑獄で又入獄した樣だから今度は彼の髭が問題になるかどうかそんな事はどうでもよい。

役人を呑むでゐる、　野依秀一

勢のよい、　平渡信

實業の日本と共に世間的知られて居るのは實業の世界であると同樣に實業の世界社長としての野依秀一君も亦同時に知られて居る。

　然し野依君の知られて居るのは實業の世界と云ふ雜誌社長として知られて居るよりも知られて居るのだ、それで又彼れの監獄行きも有名なものだ。

　それで彼れは愈々名高くなつたのである。ある人は云ふ彼れを指して浮世離れのした人物であると、實に的評ではないか彼れから監獄行きを取つたならば何が殘るだらうとは一寸酷評であらう。彼れの社長として出して居る雜誌が賣れるのも一つは彼れが世間的になつたからだ、否さうでない

口が惡る過ぎる。

　それと反對に詐欺や恐喝豫防の材料だと云ふ人もある。兎に角世間の見樣は多種多樣であるから種々な人が稱められたり笑らはれたりして持つ持たれつして居るのだとは眞理かも知れぬ。日本で一番偉い大隈さんでも澁澤さんでも彼れの云ふ事に贊成する相だ。さうすると彼れは

兎に角

彼れ見た樣な者は毒にもなれば藥にもなると云ふ樣な觀念からだと

理諺に大男總身

に智慧が廻り兼ねの通り二人共あまりに智慧を繞らしたので寧ろ少い方が今になつて見ればよかつたかも知れなかつた。此の二人他の囚人に見る樣な一種の囚人色とも云ふ樣な色を少しもなく一般社會の健康の者と少しも變らない處に彼等二人の偉い處があると共に又づるい處であるのだ。偶然にも二人よく又そろつた者さ、二人を並べて角力を取らせたら何方も負けまい、片や雜誌記者兼

野依秀一君に片や東

京帝國大學首席で出た二十七歳の時高等官四等の秀才で辯護士兼

信君だ顔と云ひ丈と云ひ、肩書と云兩人共一歩も引け分と云ふ處で軍配は分けだなんと好對象ではないか。運動に出ると看處を中央に挾んで二人は常にニヤリニヤリ笑つて居た。平渡は額の上に大きな皺が特に目に立つた。又野依君には特別の武器がある。彼れが笑ふ時は一種の愛嬌があるが、此の愛嬌と云ふのは、他人に對して凄みを帶びて居るので愛恐と云ふのが眞實であらう。それで彼の行く處必ず此の愛恐があつて彼れの仕事を大助して居るのだ、それだから彼れに會つた者は一寸感じが惡くないから遂釣り込まれるのた、例へば一種妖婦の樣な者で何んだが恐しいから會ふまいと思つても一度會ふと又逢會い度くなると云ふ一種の强い何者かを持つて居るのだ、嫌た嫌だと思つてる中にやられて了ふのだ、それだから愛恐と書くのが適當であらう。こんな具合で平渡君でも野依君でも人から恐れられる一因となつて居るのだ、平渡君には大官が威かされて金を取られたと云ふのは有名な話だよ。又野依君誰れやらから五千圓取つたとか、何とか云ふ電燈會社から二萬圓のしを附けたとか兎角世間の知る通りである。世界戰爭が講和だよと云つて日本から西園寺和尙が御花さんに巴里見物をやらせる時であつた。監獄でも囚人に其の裾分けをしやうと云ふ心持ちか何かは知らぬけど敎誨師が少しばかりほのめかしたのを一寸ぼんやりした看守から一から十まで底の底まで聞こうと思つて失敗した事もあつたが野依君の爲めに惜むから內處にしやう。其の內處の事と云ふのは日本から巴里へは誰れと誰れが行つて世界のどんな人が集まるのかどんな具合まで發表になつて居るのか話して吳れまいか、と極く柔かく持ち掛けた處ぼんやり看守殿案外にも肱鐵を喰はせられたのだ。

看守殿曰くだ、一體監獄へ行て看守に對して囚人が外交の事や政治上の事を聞くと云ふ事はあまり不謹愼であらう。君は實業の世界社長野依一と云ふ者から考へても囚人としてもそんな事を聞いてよいか惡いか位は知れぬ馬鹿では無い筈である。それだのに聞くと云ふ事は愈々以つて役人を馬鹿にして居るからそんな事を云ふのだ實に怪しからんではないかと逆襲されて何んとも濟みません一本まいりましたと言ひながら頭を兩の手で抱へたのは隨分役人を呑んでかゝつてるではないか。そんな具合で一寸甘い奴だと思へばどしどし手の中の者にして了つたそれかあらぬか兎に角二君とも假出獄をした。野依君は獄中生活でもそんな樣に不撓不屈の注意を拂つて出獄後の容易に心を用ゐて居たから今度出獄してからは俺は佛心したなどと噓か眞實か口から出任せを云つたり出他良目を書いたりして濟し込んでる事の出來るのは其の御蔭だ。兎に角時世を見るの明がある男である。そんな具合に野依たる者は心變りがして佛心したのではなくて昔の　と云ふ兇器を利用しないで、威し言句出刄庖刀はプッリ止めて二度の監獄入りで少しは氣が練れたから一切の舊式惡事を破り草履を棄てる樣に投げ棄てた者の、持つて生れた病は容易に不治と見えて、新時代に適應する新看板と掛け變へたに過ぎないだらう。其の新看板が未だぬり變へたばかりの干き切れないのだ。新看板け

驚く勿れ　佛心歸依阿彌陀化身野依秀一となつたので是れからが彼れの本舞臺だ近頃彼れの雜誌を見ると訪れてたや恩義ある者を踏付けて置いて後になつて平に筆の上で謝罪する新案を發明したらしいそれが大分受けて居るらしい世間は廣いものである。又巫渡君でもさうだ出獄して半歳經つか經たない中に裸一貫で監獄から飛び出して、王侯か何かの樣な大きな邸宅を構へて自動車で乘り廻す處などは常人には出來ない放れ業ではあるが心から、感心する譯にはならぬ唯だ腕がいゝな凄いなあと羨む樣な恐ろしくなる程な兎に角妙な氣分になつて身の毛がよだつ二人ながら見上げた者である。(つゞく)

僕たちは凡ゆる方面のほんとうの生活の寄稿を待つてゐる。現代の世に僕たちはどんな生活をしてゐねばならぬか。言ふまでもなくブルジョア生活は僕たちの問題とする所ではない。

聾人

惱み

一勞働者

今日も遲れた工場の笛に、
たつた一分遲れた罰に、
息せき切つた甲斐もなく、
今日も一日遊ばにやならぬ。

涙ぐむ目をかなたにやれば、
舟は出て行く仲間を乘せて、
向ぶの岸についた時、
其處にや寛の手が待つて居る。

絞り取られて歸つて來れば、
可愛い女もあるじやなし、
電燈の淡い光に包まれて、
待つて居る母も寒さうに、
親父じやぐつすり寢込んで居る。

怠けものよと罵る奴よ、
ずぼらものよとけなす奴よ、
だつて俺は働けない、
馬鹿らしくつて働けやしない。

怠け者と罵る奴よ、
ずぼらものよとけなす奴よ、
俺に情婦のあるじやなし、
酒もばくちも俺ら厭だ。

今日も遲れた工場の笛に、
たつた一分遲れた罰に、
今日もすごすご歸らにやならぬ。
寒い朝風身にしんで、
辨當持つ手がちぎれさう。

今度——僕等の本當な友として、又慘
じめな生活に苦しむ　　衷心から
感謝し喜ぶ者です。

是れは僕の作つた拙い詩です。言葉は拙いが僕の魂の
（榮城生）

人間を知らぬ人間

眞島榮城

兄弟よ。
お前から喜んで呉れと云つて來たが？
お前は確に名譽ある言葉で云つてるだらう！
だが！俺は何うして喜べばいゝのだ。

俺はお前の〇〇を喜ぶ氣力はないのだ
幸福だとも思はない俺だ。
俺は馬鹿野郎と思つてくれてもいゝ。
俺もお前も人間だらう。
俺は自分の生命の存在を知つてゐるだけに、
正しい權利と義務の遂行もせずに無雜作に〇されてしまふことを嫌いでならない。
人間を知らない人間のために〇されることを怖ろしくてならない。
お前が〇〇のために〇〇のために〇〇するのだと思つてゐることを否まないが――
その國民の俺だらう。
お前の〇〇することは俺のために行くことにもなるのだ。
何んと云ふ不合理なことだ。
俺もお前も人間だらう？
その人間から愛を奪つてはいけないのだ若しも愛がなかつたら、
罪はそこに立派に生れて動かないのだ
兄弟よ！
俺は自らの生命を護つて貰ふことはいゝが、
それがためにお前の生命を殺してもいゝとは思へない。
まして、
あの嚴寒の曠野にさらされて、
無智無力な者のみのために殺されに行くのだと思ふと、
俺は何うして喜ぶことが出來るか？
若し俺がそんな者に殺さるる時があるとしたらお前に罪を負はせなくとも、
もつと人道的にもつと正義に自由な權利で鬪ふことが出來るのだ。
おゝ兄弟よ、
お前はそれでも喜んでいゝとしたら、
俺は悲痛な胸を押へて悲慘な泪を捧げやうからそれなりで許るして貰ひ度いのだ。
いゝか兄弟よ。
人間を知らぬ人間にならないでおくれ

軍人も巡査も同じ仲間

安井登志男

十二月號の本誌を電車の中で讀んでゐた私が丁度洋文さんの「眼」から孝ちやんの「コスモポリタン」の詩に讀み移らうとしたときでした。ガチヤンと音がした。それは右隣りの軍人様トルストイに云はせるとMurderのサーベルの音でした。こいつはしまつた、すこしも隣りに坐つてゐるとは存知なかつた。非軍國主義號を讀んでゐるのだから奴癪にさわつた氣配を察したに違ひないと氣の小さい私はそつと雜誌を疊んで左のポケツトにこつそり入れました。となりの軍人様はどんな恐ろしい顏をした人だらう。小將か

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大將か。恐る〜〜樣子を伺つてみますと案に相違若き美しい、戰爭なんかしさうでもない青年士官がそんな事なんか知らぬ顏、易しい英語の會話の本を無中で讀んでゐらつしやる。私はやれ〜〜と思つたそしてもう一度本を出して讀まうとしたコスモポリタンが大地をふみしめて行く有樣を讀みたい。此の軍人樣もコスモポリタンの一人の樣に思はれた。しかし、しかし、この軍人は戶山ヶ原で數多の兵士に號令を下すんだらう。私は此んなことを思ふと軍國主義が益々嫌になつた。一齊射擊打て、悲鳴は上る。今讀んだ計つかしの洋文さんの「眼」を思ひ出す。

男爵も子爵も一度戰爭でも起らなけりや貰えさうでもない。不景氣は戰爭で回復出來るかも知れぬ。戰爭の準備で一儲けするんだ、天保時代の中將少將連や、資本家がザラにゐる。早々吾々の○○○○○さへ來れば、君若き軍人樣、英語をしつかりやつて直き給へ。國境を同じくする仲間よ。電車から降りて下宿へ歸つた。途中交番の前を通る。二人巡査は寒さうに立つてゐた。交番の前の駄菓子屋の硝子板に、はられた貸家の札を指さして曰く。「僕達此んな家を借らうと思へば三ケ月の月給を全部提出しなくてはならない。食はず飲ます。」に私はその貸家札を見た。家賃百五十圓。巡査さんも矢張し吾々の仲間だ。

二つの意味　MH生

私はエス市のある大きい工場の所在地から二里ばかり隔つた田舍の小學校に勤めてゐるのでございます。夕方薄暗くなつてよく宿に歸ることがあります。

そのとき青い勞働服に一日の勞れた身體を包んですた〜〜と急ぐ數百人の勞働者達からすれ違ひに此麼ことを聞かされることが度々あります。「俺達も教員でもしやうかれエ」と私はそれについて二通りの解釋をしてゐるのでございます。

勞働者の眞の力と敬虔さとから迸り出る吾々意氣地なし仲間――そんなに云はても敢て否定の出來ないのは吾々の仲間ではないかしらん――に對する嘲笑の意味。

いま一つは朝暗いうちから夕方晩くまで勞働と通勤とによつて疲勞せらるゝ彼等の職業に對する無自覺な嫌惡の情から發せらるゝ意味と。

私はこの言葉を聞くたびに願はくば前者であつて呉れといつも祈らない事はないのでございます。しかし事實は却つて後者の意味にとらるゝことの多いのを悲しく思ひます。

○　袴田生

今朝の新聞紙にて「種蒔く人」發賣禁止されたる事を知り官憲の不見識を憤ると同時に貴社に對して誠に御氣毒だと云ふ事を痛感した次第であります。改版が出來ますか御伺ひ致します。

默つてゐられぬ　京都　篤太郎生

とうとう自分にも默つてゐられない時が來た。現在の日本人の思想が餘りに狹ま過ぎる。赤い○○の血に自分等は燃えてゐる。自分等はもつと世界的の立場から仕事をしなければならない。

自分等の間に種を播

いて吳れた、た方と同じ血に燃えたつてゐる同志の一人なのだ。沈默を破つて叫ばなければならない時が來た。

自然が教へる

大分　芳田誠一

曉が來た
東の空が○○になつた
まるで○○○の旗の樣に
赤き血潮の樣に
オヽ懷かしき其の色
太陽が昇る男々しく而して
萬物を平等に眺め
立てや覺めよと叫ぶが如く
アヽ俺は飛び出したくなつた
○○○を打振り打振り
おくするな吾が兄弟よ
自然が敎へろ俺達に

私達は少年のまどゐ

京都　宮野生

發賣禁止はあまりひどいです。ざんこくです。私たちは大變不快に思ひました。私たちは未だ丁年にも達しない少年のまどいです。

阻止は再擧を促す

天を仰いで嘯く男

阻止は再擧を促し、禁壓は抵抗をそゝる內的に聲なく衝動なく鬱積したあるものは、軈て「種蒔く人」の○○に黒刷せられて居る○○の赤燃轟然、乾坤一擲の活劇を胚胎するものではあるまいか。

またか

ツチサキ・トモ

マタヤラレタカ

きがしれねえ

大賀生

國のつかさらは屠蘇の機嫌に禁止したりけり。

エスペラントについて

長野　XY生

エスペラントこそ本當に吾々の言葉の樣な氣がします。それを赤門や目白あたりの資本家の伜や阿寛つ子の玩具にして置いでは言葉が泣きます。お上から壓迫されたでは普及に差支へると考へる者もあるやうですが、吾々はこの尊い言葉をその使命と離すことに忍びません。どうか種蒔き社はその普及に努めて、勞働者にこの尊い言葉を知らせて下さい。何よりも「種蒔く人」の中にエスペラントの欄を置いて下さい。そして外國の同志の消息でも知らせて下さい。お願します（一九二一、一二、一〇）

またやりやがつた

淳三

またやりやがつたさうで、○○にもほどがある！僕は、今朝からムシャ／＼腹が立つてたまらない。

若い力

長崎　憲弘生

一時もぢつとした
心を持つてゐられない人間が
いろいろな事を考へる
若い者の心は燕の樣に
とどまる事が出來ないから
つかれたも知らないで働いてゐる
さよなら

どす黒い煙

稗田素介

今日もまた
山の向ふからどす黒い煙がむく／＼と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

立ちのぼる
何とかいふ太かい喧嘩船は
やつばりカン／＼たゝき上げられてゐるのだ
おい等の血と肉と汗と涙とをふんだくつて
千萬のおいらが兄弟をこき使つて
きやつは平氣で嘯いてゐるんだ
午後五時だ
タイラントの命令のやうな
豪慢な笛の音が響いたぞ
見ろ
血と肉と汗と涙とのありつたけを絞られて
憔悴した顔して出てくる おいらが兄弟を
疲勞と困憊との極度に達した足どり
油ににぢんだ青い服
二里の夜道は風が寒いぞ

靜動——

「正進」印刷工組合正進會の機關紙だ。現實的に鋭く突込んでゐる。再度の禁止ときちや「天災ぢや仕方がないと諦め」られまい。同病相憐む。不正進にしたくない。東京京橋新佃西町一ノ二四。

「自由人」こんなに小突廻されてもまだイケないらしい。これも不自由人組だ加藤、津田君等の健闘眼覺しい。本部移轉相州小田原十字町四加藤方。

「演歌」新安木節を宣傳してゐる。添田啞蟬坊の監修ださうな。東京下谷山伏町三七其社

「若きいのち」「おとめよもう嘆くのを止めておくれ……」と云つた調子。名古屋東區千種町中通三二草土舍。

「壞人」「破壞意思」益々猛烈。東京牛込下戸塚二七

「無名」まだ新年號出ない。餘程有名がお嫌いらしい。

「社會主義研究」再度、堺利彦氏の「敎を乞ふ」てゐる。次いでに此の次は是非德三氏の敎を乞ふて貰ひたい。兩者とも知識階級を唸せ、又必然に無產階級を毒する點に於て相通ずる。たゞ前者は徒に感傷的、後者は徒らに衒學的だが。合手にとつて不足ならどつちも同じだと思ふ。

「前衞」創刊號だ。淸新にして而も圓熟の境。願くば姉妹たる「研究」と「兩虎共不生」の嘆を發せしめざらんことを。大森入新井宿。

「宗敎と藝術」佛徒の手になるが頗るハイカラだ。京都西六條佛敎大學文藝部。

「野良」「ボク等はハッキリ詩人だと思つてゐる」人達の雜誌だ。出て行つた「ノラ」はどうなる？。府下荏原郡平塚小山其社

「カトリック」「社會組織の綱よ、爾の名はカトリックなり」だと。以可察。東京牛込田町三ノ九山本方公敎青年會。

「藝術」お上品だ。ツワイグの「ロマン・ロラン傳」可讀。東京神田表神枯町三其社。

「ナロオド」最近二名の犧牲者が出る樣子だ。遺憾の極みだ。難關突破を心から祈る。

「高原」非常に贅澤なものだ。世はさまざまの感深し。橫組になつた。東京深川西平野一七其會。

「近代生活」すばらしい抱負だ。「自ら推薦する價値あると信ずる」と。東京芝白金臺町二ノ六二となみ社。

「勞働運動」さすがに記事の整頓した新聞である。國際無政府主義大會の記事が大部抹殺されてゐるが、いつもゴオルドマン等の紹介記事に滿足せずさうした世界的會合に眼をつけてゐるところは嬉ばしい。東京本鄉駒込片町一五其社一部十錢半年六十錢。

「無我の愛」精神が異つても立場を尊重する。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

文藝 自由 雜誌

◇創刊◇

自由は反抗と闘爭とに生れる麒麟兒である新文藝復興の爲めの戰闘機關は今第一戰線に立つた。我等は創作本位で日本文壇に挑戰する

◇創刊◇

◇二月號目次◇

窮死……………辰野正男
或無政府主義者の戀……………景山要
灰色……………前田河廣一郎
孤獨なる者の嘆き……………松本淳三
白い犬……………門林兵治
りんだうの花……………潮みごり
青褪めた大きな百合の花……………平戸廉吉
山崎斌氏に與ふ……………松本俊一
純感情主義を提唱す……………山崎斌
環境……………前田河廣一郎
海外文藝
A.B.Cの傍白……………三人
執筆者略歴
石大學出行……………バナード・リーチ
小景……………平塚運

發行所 自由社 定價五十錢

□市外大久保百人町九十四□

社會主義研究

■定價三十錢
東京府下入新井
平民大學出版部

前衛

■定價三十錢
東京府下入新井
前衛社

自由人

（復活號發賣禁止）
■定價 五 錢
相州小田原十字町
自由人聯盟

勞働者

■定價 五 錢
東京市外巣鴨
宮下一七八六其社

勞働運動

復 活 號
■定價 十 錢
東京本郷駒込片町十五
勞働運動社

農民 ■■■ 土地 運動 ■■■

正直であるが爲めに、勤勉であるが爲めに、そして正しい生活を送くらうと心懸けるが爲めに、常に虐げられ蹈み躙られてゐる小作人達の道伴れとなり、力となり、そして其の人達の言葉の取次所となるための小册子です。

二月下旬創刊の豫定。四六二倍八頁定價一部五錢（創刊號希望の方は種蒔き社宛御申込置き下さい）。

（鳳 逸 平）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

堺利彦
山川均
岩佐作太郎
大杉榮　序
吉田只次著

貧乏人根絶論

四六版二〇二頁
定價壹圓五拾錢
送料八錢

◇直接發行所申込及種蒔き社取り次に限り——特價壹圓

簡單に平易に社會主義の全般を識らんと欲するものは本書に就け。本書はさういふ人々のために作られた日本第一の絶好書である。著者は本書一巻を遺して、運動の犠牲となり、今や囹圄の人となる。一部でも多く本書の讀まれることはそれだけ世を益すると共に、又この先驅者の貧しき家族を慰めることにもなるのだ。

發行所　社會主義發行所　東京麴町區元園町一ノ四四

新年號發賣禁止

前號目次

リーブクネヒトと戰爭(題言)……
藝術に於ける國際主義と世界主義(社論)……
現實の方へ(詩)……村松 正俊
旅行鞄(小說)……松本 弘二
鐵鎖を斷つ(小說)……川崎 春二
「勞働祭」前夜の曲(詩曲)……鳳 逸平
亂舞(小說)……非東 靈
俺の詩三篇(詩)……石渡 山達
地上にて呼びかくる(詩)……角岡春之助
プロレタリアトの歌へる(詩)……[illegible]近 市子
談りゆく一月の空(漫話)……柳瀬 正夢
批評=世界欄=地方欄=婦人欄=讀人欄

編輯後記

再度の發賣禁止は内外を張粱させたかうなればもう理屈なしだ。發賣禁止は否定することの出來ない眞理を當局が裏書するといふものだ。「種蒔く人」は文藝雜誌であることを記憶せよ。平林初之助、津田光造松本淳三の三君がこんど僕たちと一緒に編輯をやることになつた僕たちは□□が思つてゐるやうに、金を□□□からもらつてゐなければ、また資金家からもらつてゐはせぬ「種蒔く人」のほんとうの力は、目標を同じくして進む若い同士の屈せぬ力であるそれが、よかれ惡かれ五號まで出せるまでに漕ぎつけた。若い多くの者が僕たちと一緒に何を求めつゝあるかといふことの立派な反映ではないか。「前衛」が新年早々前衛となつて發行され「勞働運動」、「自由人」が勢よく復活し、更らに今月から文藝仲間の自由が生れた。「種蒔く人」が「種蒔けぬ人」となつたやうに「自由」が「不自由」ならざる成長を切に祈る。こんな投書が來た。

定價 一部四十錢□半年前金二圓四拾錢□一年前金四圓八拾錢御注文はすべて前金のこと□代金の領收は雜誌發送を以てする□送料内國一錢外國四錢

廣告 廣告及廣告料金については直接本社宛問合せ乞ふ

宛先 寄贈、通信、購讀申込及び送金其他本誌に關する一切の御用向書籍雜誌等の寄贈は凡て『種蒔き社』宛

締切 毎月五日

大正十一年一月七日印刷納本
大正十一年二月十日發行

東京市赤坂區青山北町一丁目八番地
發行人編輯人 印刷人 近江谷駉

東京市神田區松下町七番地
印刷所 大潮社

東京市赤坂區青山北町一丁目八番地
發行所 種蒔き社 振替口座東京五九三八七

大賣捌 東京堂 上田屋 北隆館 至誠堂 東海堂

種蒔く人 第二年第二卷第五號 (大正十年十二月一日第三種郵便物認可)
大正十一年二月七日印刷納本 大正十一年二月十日發行

本號四十錢

批評‖世界欄‖地方欄‖婦人欄‖[illegible]人欄

大賣捌
東京堂　上田屋　北隆館
至誠堂　東海堂

種蒔く人　第二年第二卷第五號　（大正十年十二月一日第三種郵便物認可）

大正十一年二月七日印刷納本
大正十一年二月十日發行

本號四十錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA